

新古改撰誌記

卷之五

〔朱書〕
二三百拾九

天保十三寅年正月 日左之書面五役并無役世話役下ケ札致、高倉
助五郎江返却

一、五役之者無役ニ入候上何之子細有之揚屋入并預と相成候共都而
身ニ付候儀、宅書物入等迄頭ニ而引受万端世話いたし可申事、尤
手足り不申節者無役世話役心附助合候様可被致候、右者寛政度
之振合を以相改此度申渡置候事

正月

佐々木三藏

〔朱書〕
二三百拾

同年二月御書付写四郎殿御渡承附いたし御同人江返却

黒鋏之者頭
御掃除之者頭
御中間頭 江
御小人頭
御駕籠之者頭

別紙撰津守殿御渡被成候御書付写差出候事

二月

一、昨日 御成之節雨天ニ而濡御手当定例之通被下、路次悪敷候ニ
付御徒より以下之者共 思召を以別段御手当被下候間、得其意
可被申聞候事

寅二月

同年二月左之書面承附いたし返上、御供組頭佐藤定藏・御使組頭
鈴木新太郎江申渡ス

黒鋏之者頭
御中間頭 江
御小人頭
御駕籠之者頭

金貳兩壹分貳朱
銀壹匁五分

金拾壹兩壹分

金三拾貳兩貳分

御中間組頭 壹人
御小人組頭 三人

御小人目付 四拾八人
御玄關番 八人
御小人押 貳拾五人

御中間 四拾八人
御小人 百五拾八人

金三拾七両老分

御駕籠之者

四拾人

金拾両

黒鍬之者

百六拾三人

右之通去ル五日浜御庭江 御成之節、格別之 思召を以別段

御手当被下候、尤受取方之儀者御勘定奉行江可被談候

右撰津守殿被仰渡候事

(朱書)
「二百廿弍」

御中間御供組頭

老 人

御小人組頭

三 人

御小人

龜井坊

老 人

同 御参内傘持

老 人

同 御金剛持

老 人

同 老

老 人

同 御日傘持

老 人

同 御草履取

四 人

御小人目付

五拾四人

御玄關番

御小人目付

御玄關番

御小人押 六 人

御先練 式拾五人

御中間

七 人

同 御小人

拾五人

御中間

五拾九人

御小人

百三拾三人

御駕籠之者

七拾七人

黒鍬之者

百拾六人

右去月晦日上野 御参詣之節、格別之 思召を以定式御規式

之節之濡御手当被下候通被下置候、尤受取方之儀者御勘定奉行

江可被談候

二月

佐々木三藏

(朱書)

「二百廿弍 三百三十一組合」

寅三月 日

御中間頭 江

御小人頭

是迄御側衆を始奥向其外御用部屋御人断、每度間違或者不調法
有之甚以不宜、尤奥向御人断宅状使等者数多之義故自然行違候
様ニも成行、乍去右様相成居候ハ、日々諸方より沙汰を受、詫

言のミ致居候様相成不宜、自然度々候ハ、格別敷敷御沙汰を蒙り候様相成候間、此度猶又改革いたし実事差支無之、また後弊無之断刻限遅滞無之、以来聊以行違無之立法を立御人も是迄より人数相増候共、又奥向其外是迄難義致し候廉者夫々掛合取扱都合宜方ニ申談候間、右等之廉得与勘弁いたし早々相認差出候様可被致候事

三月

榊原主計頭

別紙

以御書取被仰渡候趣熟覽仕、於私共平常組之者共江申付方不行届段奉恐入候、依之得与勘考仕候処、寛政已後連年御用度も相嵩、其上組之者共御用所勤辻番掛・御門帳掛・芸術掛・御詮議掛り・駒場野掛り等江御中間・御小人・触番之者迄御用除ニ相成候者共、当時百式人程何れも身分御馬方御使触番之者趣意不相守、本勤御用多又者御人少之節御供組頭・御使組頭共より触達仕候而も掛り御用多を抛ニ言成、又者急病断等申立不勤之者とも有之段、組頭共より申聞候得者其都度々々掛り御徒目付江掛合 御成御用等為相勤候儀共有之、御用除之者共身本勤を忘失仕候様ニ成行、且近年別而御用除之者多相成候ニ随ひ、自御馬方御使触番之者御人少ニ付本勤之方手詰奥附奥状等相嵩候節、御用向も行違ニ相成候儀共出来候間、向後御中間・御小人御用除之者より日々泊無之三人宛御小人目付加へ与唱ひ、御小人目付部屋江為相詰候得者自然御中間目付・御小人目付相勤候向も見覚往々目付役被 仰付候節御用弁ニも相成、且御小人目付者世話役共八人・二丸勤式人・御供扣泊無之

三人都合拾三人ツ、隔番ニ相勤罷在候間、御使之者より暇日も多、且台部屋御門外奥向通行之節御門断も有之候儀ニ付、旁以老人相増勤候様被仰聞候ハ、全四人之者共者奥向御用のミ相心得出勤仕候ハ、御差支無之儀与奉存候、万一右四人ニ而引足不申候節者、日々定式当番御小人目付御使之内より御用弁可仕旨、御使組頭・御小人目付世話役江申渡候様可仕哉

一、寛政以後奥附御用相勤候者 御本丸・西丸 御成之節ニ濡御手当被下置候処、去丑年組之者共勤向改革之節より右御手当不相願候処、此度御人少ニ而御用御差支之義ニ付前条四人ツ、日々詰切為相勤候ニ付、夕御台所断且格別之 思召を以 御本丸ニ而濡御手当相成候節々、四人之者共御供並之通御手当奉願候、願之通被仰渡候ハ、日々奥向誰殿断之分誰与申義一々帳面ニ記為置御用度数ニ而右御当金割渡候様申渡候ハ、輕者共之義ニ付我勝ニ相勤御用向遅滞無之儀与奉存候、私共儀評議仕候趣書面之通御座候、依之御下ケ被成候御書面返上此段申上候、以上

寅四月

御中間頭
御小人頭

(朱書)

「三百廿二」

天保十三寅年二月 日願之通申渡候旨主計頭殿申渡、其段御供組頭佐藤定蔵江申渡ス

奉願候覚

御中間御供組頭・同御馬攣人奥向衆御馬乗様遠馬之節、寛政度より雨天ニ候得者、濡御手当願御厩向より御口之者奥伺御聞濟御

座候を承合、御馬擧人御手当願御供組頭より出方人数書差出候
 二付、猶又私とも評議仕御馬出方ニ応シ人数等相改願書相認メ
 差出、其時々御手当銀御渡方ニ相成、夫々組之者江相渡候処何れ
 も難有頂戴仕候、然ル所去十一月中右擧人 御成無御座候節者、
 御手当願申間敷旨被仰渡候ニ付其段夫々江申渡奉畏候、右者御厩
 向ニ而御口之者矢張是迄之通御手当相願候間、何卒御馬擧人之
 儀も御手当相願度段、御供組頭共より申立候得共、御時節柄御
 入用ニも相響可申成丈ケ申論置候処、再応相願候間私共評議仕
 得与勘弁仕候処、御馬擧人之儀者一格別骨折相勤、雨天之節者
 傘者勿論相用兼、且者泥放等ニ相成候而も差掛り、洗濯之手当茂
 差支難洪仕候者実々相違も無御座候に付、御馬乗様遠馬之節茂
 唯今迄之通御手当被下置候様仕度奉存候、左候得者一同励ニも
 相成、於私共難有仕合奉存候、評義仕此段奉願候、以上

寅二月

御中間頭

畔柳丈之進
 松永半左衛門
 永坂鑑八

(朱書)
 「三百廿四」

天保十三寅年四月十六日

御中間頭
 御小人頭

明後十八日追鳥狩 御成之節諸事例年鶉勢子之通相心得可申事

一、御纏 御小人方 五人
 御中間方
 一、御摩 御小人方 五人
 右者当朝七ツ時中渋谷名主惣右衛門方迄為相揃御徒目付差函請
 候様可申談候

但持人姓名書付於下宿可差出候事

一、御番方雉子打留請取候節之ため、馬繫場江擧人御中間四人宛式ケ
 所江差出候而、都合八人差出可申候、尤御場所御鳥見江引渡候事
 四月十六日 浅野金之丞
 野間忠五郎

(朱書)
 「三百廿五」

五役頭江

支配向御台所被下候処、当時昼御断并臨時御断人数取調、定式臨
 時格之通書付可被差出候、尤西丸之分者相除可申事

四月

佐々木三蔵
 榊原主計頭

御台所定碗人数書付

御中間頭
 御小人頭

覚

日々御台所被下候分

一、御中間頭 三之間御縁頼
 同 夕 老 人
 一、御小人頭 夕 老 人

御中間 之内
御小人頭 老 人

右者 御城内 御成御供之節焼飯被下置候、尤其時之別段御断者差出不申候

新土戸番 式 人

御長屋御門番 三 人

右者 駒場野 御成之節御雇罷出候間、明番居残候者朝御台所御断申上候

御小人 六 人

右者 触番之者より御供扣ニ日々差出候ニ付、朝夕御台所申上候

御中間 合三拾三人
御小人

右者 九ツ半時過之御供揃ニ而吹上江 御成之節焼飯御断申上候、

御湯漬御断之儀者夕七ツ時頃右人数并御挑灯持人御小人拾式人御断申上候

御中間 合四拾五人
御小人

右者 西丸并二丸・三丸江 御成之節前文之御刻限ニ候得者焼飯御断申上候、御湯漬御断之儀も前書之刻限御断并御挑灯持人御小人数同様御断申上候

御中間 合三拾五人
御小人

右者 紅葉山江 御成之節明ヶ番之者より御供仕候ニ付朝御台所御断申上候

御中間 合 拾四人
御小人

右者 二丸奥締り被仰渡候節、所々出役之者江夕御台所御断申上候

御中間 合五拾五人
御小人

右者 遠 御成之節明ヶ番より御供ニ罷出候ニ付、朝御台所御断申上候

但御前夜九ツ時迄ニ 御引延被 仰出候得者御断返申上候

御中間 合 拾 人
御小人 内三人支度

右者 遠 御成之 御前日御用多ニ付呼出候間、夕御台所御断申上候

御中間 合 拾 人
御小人

右者 駒場野并 御屋形向江被為 成候節半蔵口并御鷹御門通り

西桔橋より 還御之節、内御供相廻り候ニ付、御湯漬御断申上候

御中間 合 拾 老人
御小人

右者 吹上江 一位様 御入之節并御女中様被参候節、組々出役仕候者江焼飯御断申上候

御中間 合三拾八人
御小人

右者 西丸江 一位様 御入之節御供仕候者江焼飯御断申上候

御中間 合 拾 人
御小人

右者吹上より二丸迄奥締りニ相成候節、所々出役仕候者江御湯漬御断申上候

御中間 合 五拾人
御小人

右者表御能之節所々出役仕候者江夕御台所御断申上候、御能夕七ツ時頃迄ニ相成候節者御湯漬御断申上候

右之外 一位様 浜御庭江 御入 御宮并 御靈屋 正遷

座、下遷座、御三家方・御三卿方 浜御庭江御出、奥向捉飼・魚(獵力)

徠御用、焼飯御断、出火之節欠附罷出候者江御湯漬御断之儀ハ其節々御用次第ニ而御断申上候

一、御番所向并 御長刀役・御小道具役煩多ニ而居残り相勤候節者朝夕御台所御夜食共被下候様御断申上候、已上

右之通御座候、以上

天保十三寅五月 御中間頭 御小人頭

天保十三寅年四月 日左之書面西丸御使持参、四役承付致シ直ニ返却

黒鍬之者頭
御掃除之者頭
御中間頭 江
御小人頭
西丸御駕籠頭

西丸御台所諸席御料理定式人数之儀、去丑年 御移徙并 御婚札被為 在候ニ付而者諸向人数増減も可有之候得共、此度御改革ニ付猶又取調候様越中守殿被仰渡候、右ニ付西丸御台所定碗頂戴之人数朝夕夜共委細相認メ早々可被差出候事

四月

西丸御台所定碗人数書付

覚

西丸御台所定碗被下候分

一、西丸御持鎗之者

一、西丸御台所口前御門番

一、同 御納戸口番

一、同 大奥裏締戸番

一、大奥御広敷御長屋御門番

一、大奥表仕切土戸番

一、野方御使之者

御小入方
一、西丸御使組頭

一、同 御中間目付 打込
御小人目付

一、御用方

西丸
一、御草履取役

一、御使之者

服部一 郎右衛門

御中間頭
御小人頭

四之間

朝夕夜 四人
夕 六人

同 朝夕夜 式人

同 右 同断

同 右 同断

同 右 同断

同 右 同断

同 夕 五人

同 朝夕夜 壹人

同 同当番 朝夕夜 八人

御供扣 夕 三人

同 朝夕夜 壹人

同 朝夕夜 拾人

一、御用方

一、西丸御風呂屋口番

同加番	三人
同御供夕	三人
同御供夕	六人
同	三人
朝夕夜	三人

右之通御座候、尤去丑年

御移徙并

御婚礼被為

在候ニ付而

者増減之儀無御座候、已上

寅五月

御中間頭
御小人頭

(朱書)
二百廿六

天保十二丑年九月左之願書御供組頭佐藤定藏より差出ス

奉願候覚

一、私共儀出番之節弁当持参仕相勤申候 御成等ニ而御早御門明キ之節者未明より張番仕前日持参仕候弁当も遣払、帰番仕候迄者最早可相用弁当も無御座殊之外難渋仕、次ニ者同役ども病氣差合等ニ而引込申来候節迎も不如意之ものどもニ御座候得者、弁当為持候者迎も無御座、早速ニ弁当も難相用毎度難渋至極仕候間、何卒御台所頂戴被 仰付御奉公も取続一同相勤候様御願被下置候様偏ニ奉願上候、以上

天保十二丑年九月

新土戸番

風間太郎
前田夕太郎
松永清兵衛

伊倉為人殿
畔柳丈之進殿
松永半左衛門殿

鷹巢長藏
増田岩五郎
滝野佐十郎
金枝新兵衛
小宮山十郎左衛門

天保十三寅年四月八日主計頭殿江口上添丈之進差出候処、同年六月廿日願之通可申渡旨堀田摂津守殿被仰渡候段、佐々木三藏殿立合榊原主計頭殿被申渡候事

御台所奉願候書付

覚

新土戸御門番
御中間
式人

右新土戸御門番当番泊り式人宛相詰候処、前々より御台所不被下置銘々自分弁当持参仕罷出申候、然ル所 御成其外御門明キ早之節者未明より張番仕、前日持参仕候弁当も暑中杯ニ者別而味変寒中迎も冷冰毎度難渋至極仕候趣、番人共歎願仕候ニ付私共評議仕候処、一鉢小給之者役米等も無御座昼夜勤番仕朝夕夜食共銘々弁当持参仕候義何れも困窮之躰御座候間、御中間外御門番並之通御台所被下置候様仕度奉存候、右番人共より者兼々願出候得共御入用ニも相響候儀故、是迄之通弁当持参可相勤再応申渡置候得共、実々難渋之訳柄相違も無御座候義ニ付、何卒可相成御儀ニ御座候ハ、御台所被下置候様仕度、此段於私共奉願候、以上

(朱書)
「天保十三」 寅四年

(朱書)

撰津守殿

御台所定式御断御扣

月番

榊原主計頭
浅野金之丞

覚

新土戸番

式人

右新土戸御門番式人宛朝夕夜共御台所被
下置候ニ付、定式御断被仰渡可被下候様
仕度奉存候、以上

寅六月

御中間頭

三名

(朱書)
「三百廿七」

天保十三寅年四月 日御月番江差出候处、同年六月廿八日主膳正
殿被仰渡候段、三五郎殿立合鐘次郎殿被申渡書面ヒレ付返上、被
仰渡相濟御普奉行江懸合候处、同組相對替ニ付彼方ニ而立合不申旨
吉際源藏申聞候

拝領屋敷相對替
之儀申上候書付

拝領屋敷相對替奉願候覚

御中間頭

畔柳丈之進
松永半左衛門
永坂鑑八

書面願之通御台所被
下置候旨被仰渡奉承
知仕候

御中間頭

寅六月 畔柳丈之進
松永半左衛門
森澄太郎作

月番 諏訪庄右衛門
松平四郎

畔柳丈之進 (組脱力)

高拾五俵老人扶持
内三俵御足高

拝領屋敷小石川安房町
七拾坪

右屋敷

高拾五俵老人扶持
内五俵御足高

拝領屋敷四ツ谷新屋敷御切手町
八拾坪

右屋敷

右金藏・弥吉屋敷何之頃拝領仕候哉年月等相知不申、尤其是迄相
對替不仕候

右拝領屋敷書面之通相對替仕度金藏・弥吉相願候ニ付申上候
右之通被 仰付被下置候様仕度奉願候、以上

寅四月

御中間頭

畔柳丈之進

御中間

和田金藏

同人組
同断

鈴木弥吉江

鈴木弥吉

和田金藏江

例書

渋谷筭橋

一、式百式拾坪余

内

切坪ニ而百坪余

右屋敷

御鳥見

梶田磯五郎

小林八郎次江

御中間

高拾八俵老人半扶持

小林八郎次

梶田磯五郎江

本所吉岡町
一、百四拾三坪五合

右屋敷

右之通屋敷相對替天保九戌年四月廿五日月番水野采女江差出候
處、同年五月廿八日願之通相對替被 仰付候旨堀大和守殿被仰
渡候段水野舍人立合鳥居耀藏申渡候、以上

寅五月

御中間頭

畔柳丈之進

御目付江

鈴木弥吉（敷脱カ）拝領屋

畔柳丈之進組

四ツ谷新屋敷御切手町

御中間

八拾坪

和田金藏江

和田金藏（敷脱カ）拝領屋敷

同人組

小石川安房町

御中間

七拾坪

鈴木弥吉江

右願之通屋敷相對替被 仰付候、御普請奉行江可被談候

〔朱書〕
「三百廿八」

天保十三寅年六月九日主膳正殿御渡三五郎殿御達

御書院番

本多日向守組

兵庫助弟

松平謹次郎

此度於麴町善国寺谷学問教授所御再建被 仰付、右謹次郎江教
授之儀申渡候間、追々普請出来之上来学之もの有之輩者貴賤ニ
不限自身又者子弟等召連、直ニ教授所江相越、其段申入可受教授
候、且又謝物等其分限ニ応し相贈り候儀者可為勝手次第候之間、
諸事手重ニ無之様相心掛可為修行候

寅六月

〔朱書〕
「三百廿九」

同年三月十三日月番主計頭殿江永坂鑑八差出ス、太田清太郎武士
屋敷之儀ニ付別紙致シ、尤取戻之儀無之事

御目付支配無役之者拝領屋敷
上り之儀申上候書付

月番

覚

拝領屋敷麻布白銀

御殿跡

百坪

御目付支配無役

太田清太郎

右清太郎儀去月廿三日如何敷筋之趣相聞不埒之儀ニ付、御切米
御扶持方被 召放候、依之書面之通拝領屋敷上り之儀御普請奉
行江被仰渡可被下候、以上

寅三月

御中間頭

同年九月二日御部屋良格を以差出ス

覚

元御目付支配無役
太田清太郎

右清太郎上り地昨朔日御普請方改役浜野安次郎江引渡候旨組役
之者相届申候、依之御届申上候、以上

〔朱書〕

「天保十三寅」九月二日

御中間頭
無役世話役

(朱書)
「三百三拾」

同年三月十三日月番主計頭殿江永坂鑑八差出ス、尤御掃除之者・黒鍬之者・御小人ニも上り地有之、同様差出ス

御目付支配無役之者
上り之儀申上候書付

覚

月番
榊原主計頭
浅野金之丞

拝領屋敷四ツ谷新屋敷三軒町

御中間大縄之内

七拾八坪余

御目付支配無役
岡本繁之助

拝領屋敷湯島三組町

同断

七拾三坪余

同断

神谷権平

拝領屋敷本郷春木町老丁目

同断

九拾壹坪五合

同断

萩原助三郎

右繁之助・権平・助三郎儀去月廿三日如何敷筋之趣相聞不埒之

儀ニ付、御切米御扶持方被 召放候、依之書面之通拝領屋敷上り

之儀町奉行江被仰渡可被下候、以上

寅三月

御中間頭

同月廿四日御扣共三通、例書老通相添月番庄右衛門殿江差出ス

御中間大縄屋敷

取戻之儀奉願候書付

月番

榊原主計頭
浅野金之丞

覚

拝領屋敷四ツ谷新屋敷三軒町

御中間大縄之内

七拾八坪余

御目付支配無役

岡本繁之助

拝領屋敷湯島三組町

同断

七拾三坪余

神谷権平

拝領屋敷本郷春木町老丁目

同断

九拾壹坪五合

同断

萩原助三郎

右繁之助儀此度御扶持被 召放、町屋敷上り地ニ相成申候、右者

御中間大縄屋敷ニ御座候間、取戻相願可申候処、町会所引受ニ相

成候ニ付追而取戻相願可申候、権平・助三郎儀同様ニ付町屋敷上

り地ニ相成、右者御中間大縄屋敷ニ御座候間、先格之通御中間組

江御返し被下候様奉願候、以上

寅三月

御中間頭

下ケ札

本文繁之助儀拝領町屋敷上り高を以町会所金借用有之、返納方滞候ニ付皆済迄於同所右屋敷引受ニ相成居候間、此度取戻相願不申、追而皆納之上取戻相願候而も差支之儀無之哉之旨、町奉行・御勘定奉行・御勘定吟味役江及掛合候処、差支之儀無之旨申聞候間、追而取戻相願可申候

下ケ札

本文権平・助三郎儀拝領町屋敷上り高を以町会所金

借用有之候ニ付、残金返納此方引受皆済可為仕候間、取戻之儀奉願候而も差支之儀無之哉之旨、町奉行・御勘定奉行・御勘定吟味役江及掛合候処、差支之儀無之旨申聞候間、取戻願之通被 仰付被下候様仕度奉存候

例書

御目付支配無役
松岡銀藏

右銀藏儀御扶持被 召放、拝領屋敷上ケ地ニ相成候処御中間大繩屋敷ニ付、天保五年八月取戻之儀申上候処、同年十月願之通元組江御返し被下候旨相模守殿被仰渡候

寅三月

御中間頭

天保十三寅年三月廿八日御扣共式通御部屋仙覺を以差出ス

町奉行衆
御勘定奉行衆
御勘定吟味役衆

元御中間岡本繁之助・神谷権平・萩原助三郎儀、御扶持被 召放候ニ付、上り地繁之助四ツ谷新屋敷六軒町七拾八坪余、権平湯島三組町七拾三坪余、助三郎本郷春木町壱丁目九拾壹坪五合、右者御中間大繩屋敷之儀ニ付取戻願差出可申奉存候、然ル所繁之助儀者町会所金滞候ニ付、於同所引受ニ相成居候間、追而皆納之上取戻願差出可申奉存候、外式人者借受有之候町会所金右残

金返納之儀者、此方ニ而引受皆済可致旨申上取戻之儀可奉願奉存候、尤文化二五年六月元御中間江守覺太夫上り地之節、会所金返納皆済迄余人江被下候儀、御見合有之候積り元御伺濟之趣を以、町奉行衆・御勘定奉行衆より御達有之、其節茂此方ニ而引受返納之積り申上願之通組江御返し相成、其後天保五年八月御目付支配無役松岡銀藏御扶持被 召放、町屋敷上り候節も御掛合之上右振合を以、取戻之儀申上願之通組江御返しニ相成候間、此度も右之通仕度奉存候、御差支之儀茂無御座候哉、此段町奉行衆・御勘定奉行衆・御勘定吟味役衆江御掛合被下候様仕度奉存候、以上

寅三月

御中間頭

右之通御中間頭申聞候間及御掛合候、以上

寅三月

榊原主計頭
浅野金之丞

下ケ札

御書面之趣相糺候処、都而町会所貸附有之上り地之分者返納残金皆済迄者町会所預ニ致し、月々上り高同所江取立皆済之上地面返上可仕、夫迄之内余人江被下候儀者、御見合之積り元同済ニ有之候処、繁之助元拝領地面之方者當時町会所預り地面之儀ニ付、返納残金追而皆済之上取戻之積り、権平外壱人方者残金之分御中間頭引受皆納之積りを以、取戻願御進達有之候義ニ候得者、町会所おゐて差支無之候、繁之助方も残金之分同様御中間頭引受、此節

一時ニ皆納致し候得者、取戻願御進達有之候
而も無之候、此段及御挨拶候

寅四月

遠山左衛門尉
鳥居甲斐守
梶野土佐守
根本善左衛門

六月廿日

覚

拝領屋敷湯島三組町
七拾三坪五合

元御目付支配無役
畔柳丈之進組筋
神谷権平

同年六月十九日左之式通共御部屋永喜を以被遣候ニ付承返却

御目付中

遠山左衛門尉

拝領屋敷本郷春木町老丁目
九拾壹坪五合

同断
松永半左衛門組筋
萩原助三郎

拝領屋敷湯島三組町
七拾三坪余

元御目付支配無役
神谷権平

六月廿一日

御中間頭

畔柳丈之進
松永半左衛門

同断

本郷春木町老丁目
九拾壹坪五合

同断
萩原助三郎

右地面引渡候ニ付町奉行方より罷越候者
名面左之通

遠山左衛門尉組与力
島喜一郎

同組年寄同心
吉沢保兵衛

鳥居甲斐守組与力
吉田百助

同組年寄同心
小倉久左衛門

六月十九日

町年寄手代
中川新兵衛

地割役手代
宮崎重兵衛

御目付衆

遠山左衛門尉

神原新助
沢田大助

昨日及御達候今日地渡之儀、岡本繁之助・田原市太郎儀者町会
所預地ニ相成居、当時取戻ニ者不相成場所ニ有之候処、金調達ニ

而認かへ差進し申候間、則認直し別紙御達申候間御引替可被下
候、此段御断返旁得御意候、以上

覚

一、湯島三組町神谷権平拝領屋敷上り候処、右者御中間大縄屋敷ニ付
元組江返被下候間、今日各方御出間敷・坪数御改被成、右絵図面

之通無相違受取申候、為後日仍而如件

畔柳丈之進組

御中間組頭

天保十三寅年六月廿日

受取人 笹川文左衛門

同

御中間

立合 深谷与十郎

町年寄衆中

(朱書) 〔三百三拾壹〕 三百式十式組合

寅六月 日当番所蒔田又三郎相達、頭取大野平作・世話役高橋清

八江申渡承付取置

御中間頭 江

御小人頭 江

近来諸御用向相嵩別而奥向御人断不行届ニ付、御小人目付かへ

江御中間・御小人之内ニ而日々三人宛定式ニ差出、奥附并御断方

江除置御用相達候様可申渡候、尤 御城内外 御成之方 江も差

出濡御手当ニ相成候節、右三人之内壹人者差かへ御断差出可申

候事

寅六月

佐々木三蔵
榊原主計頭

(朱書) 〔三百三拾貳〕

寅七月十二日左之御附札を以伊勢守殿被仰渡候段、忠五郎殿立合

主計頭殿被申渡候書面繕附返上

一、御駕籠之者高橋重五郎昨日遠島被 仰付候ニ付、御駕籠之者頭

三人差扣伺式通、此方両役名前ニ而御部屋(空白ママ) を以差出ス

御附札

御目見遠慮之格可被申渡候

(朱書) 〔三百三拾三〕

寅七月 日四役承附いたし返却

黒鍬之者頭

御中間頭 江

御小人頭 江
御駕籠頭

指物雛形短冊是迄金箔相用差出来候分茂有之候ニ付、文字ニ者

金与相認、立合者黄ニ而相認メ差出候様此度向々江相達候間、

差出候節ハ右之通可心得候事

寅七月

岡村丹後守
浅野金之丞

指物雛形壹枚ニ壹品宛認、都而式通ツ、差出候様先達而申達置

候処、以来三通り宛差出候様相心得、今壹通認メ一両日中可差

出候事

七月

浅野金之丞

(朱書) 〔三百三拾四〕

天保十三寅年四月晦日月番四郎殿江差出ス

御中間大繩屋敷

取戻之儀奉願候書付

月番

覚

拝領町屋敷

本所菊川町四丁目

七拾老坪

御賄頭

佐藤清五郎

右清五郎儀此度武士地拝領被 仰付町屋敷上ケ地ニ相成申候、

右者御中間大縄屋敷ニ御座候間、先格之通御中間組江御返し被

下候様奉願候、以上

寅七月

御中間頭

畔柳丈之進

松永半左衛門

永坂鑑八

例書

拝領町屋敷本郷元町

百坪八合

御徒目付

神谷昇大夫

右昇太夫儀此度武士地拝領被 仰付町屋敷上ケ地ニ相成申候、

右者御中間大縄屋敷ニ御座候間、先格之通御中間組江御返し被

下候様奉願候処、天保八酉年十一月願之通被 仰付候

天保八酉年十一月

御中間頭

天保十三寅年九月廿三日左之書面御部屋永喜を以御下ケ、両役

承付返上

御目付中

遠山左衛門尉

拝領町屋敷本所菊川町四丁目

七拾老坪

御賄頭

佐藤清五郎

同断

浅草阿部川町

御小人大縄之内

五拾七坪

御目付支配無役

内海芳次郎

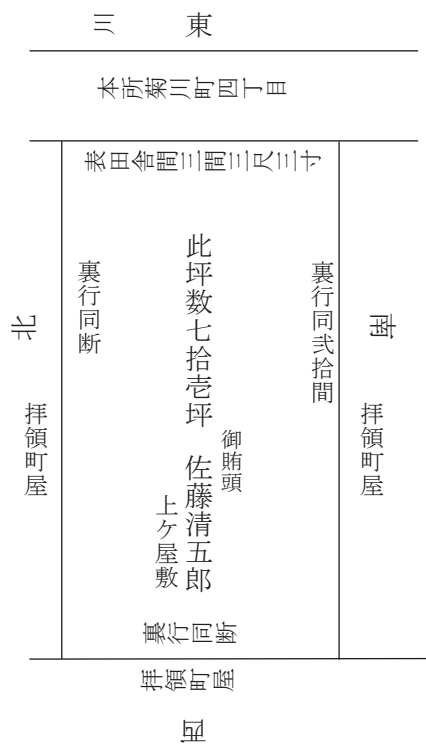
右清五郎儀者此度武士地拝領ニ付町屋敷上り地ニ相成、芳次郎

儀者御扶持被 召放上り地ニ相成候間、夫々元組江返被下候間

御引渡可申候、依之明廿四日四ツ時晴雨共右場所江受取人并立

合之者可差出候、尤本所菊川町四丁目之方江御差出可被成候

九月廿三日



本所菊川町四丁目佐藤清五郎拝領屋敷上り地ニ相成候処、仲ケ
間大縄屋敷ニ付元組江返被下候間、今日各方御出間数・坪数御
改御渡被成、右絵図面之通無相違受取申候、為後日仍如件

天保十三寅年九月廿四日

畔柳丈之進組

御中間組頭

中山藤右衛門

印

同人組

御中間

深谷与十郎

印

都筑金之助殿
安藤源之進殿
町年寄衆中
樽屋三右衛門殿

太兵衛

本所菊川町四丁目御賄頭佐藤清五郎拝領大縄町屋敷上ケ地、御
中間大縄町屋敷ニ付元組江返被下候間、今廿四日四ツ時為受取
右場所江罷出候処、遠山左衛門尉組与力都筑金之助より右地面
受取申候間、此段御届申上候

右場所江出役之者

遠山左衛門尉組与力
都筑金之助
同組年寄同心
前橋佐兵衛
鳥居甲斐守組与力
安藤源之進
同組年寄同心
永谷兵藏
町年寄
喜多村彦右衛門手代
中村新兵衛
同
樽屋藤左衛門手代
石島七兵衛
地割役
樽屋三右衛門
同人手代
中野喜兵衛
菊川町四丁目
名主
川村太郎兵衛
家守
惣兵衛
組合

右清五郎上ケ地地代一ヶ年川岸附共式両三步

右預り主中山藤右衛門相心得申候、此段名主・町頭江も相達置申
候、依之此段申上候、以上

寅九月廿四日

中山藤右衛門 印
深谷与十郎 印

覚

昨廿四日御賄頭佐藤清五郎拝領大縄町屋敷上ケ地、御中間大縄
町屋敷元組江返シ被下候ニ付、遠山左衛門尉組与力都筑金之助・
鳥居甲斐守組与力安藤源之進より受取候旨組役之者相届申候、
依之申上候、以上

寅九月廿五日

御中間頭
畔柳丈之進

(朱書)
「三百三拾五」

天保十三寅年三月十一日

奉願候覚

一、本郷元町三浦竜次郎并私拝領地面地境ニふせ有之候下水之儀難
心得様子見受候ニ付、昨日私地面相改候処別紙絵図面朱引之
通ニ而表境宜御座候得共、下水之儀者木津屋建家之方江附堀入有
之、西之方下水淵私地面地境ニ相成居候間全ク私地面内江堀入
有之、殊ニ私地面内ニ差置候木津屋・河内屋ニ軒共相用ひ候下水
之儀者則朱引之通私地面内ニ堀入有之候、左候得者竜次郎方ニ而
遣候下水私地面内江堀入置候儀心得違奉存候間、家主重左衛門

を以爲掛合候処、竜次郎養母我意のミ申聞候ニ付無扱又々申上候、於下水當時者土ニ埋有之候附而此度長屋修復ニ付堀起候間、古来より有来候下水杯と申居候由ニ御座候得共相糺候処、天保二卯年十二月附候由ニ御座候、且亦竜次郎地面内ニ者繪図面之通西之方往来江向ケ水流下水附御座候処、長屋折返し軒下ニ下水無之故、私方地境江壱ケ所外ニ附候儀与奉存候、何れニも竜次郎方ニ而遣候水流下水之儀ニ付同人地境内江寄セ附候様被仰渡可被下候、則繪図面相添此段奉願候、以上

寅三月十一日

宇佐美彦四郎 印

畔柳丈之進殿

口上書を以申上候

一、私拝領地面隣彦四郎地面境古来より下水御座候処、流患敷故五ヶ年以前より打捨有之候処、此度右下水先規有形を以取替可仕与存候処、彦四郎地面内江相掛候様申立願出候ニ者、右下水之儀者新規ニ相付其後早速打捨有之候様子申候得共、今以左様之儀ニ者無之水流患キゆへ其儘ニ捨置有之候、然ル所私古来之儀者一向弁不申候得共祖母より右承り居、猶又去ル十二ヶ年以前ニも地境之儀ニ付、双方立合之上家主十左衛門住居東地境江石垣之下水有之候、是より内調致し其節全相違も無之由ニ而下水も先規通致其儘ニ相濟有之候処、又候此度右地境下水之儀ニ付願出候之趣如何ニ御座候哉、一向相分り不申勿論右石垣より御調被下置候ハ、相分り可申哉与存候間、偏ニ以御憐愍前々之通被成下置度奉願候、以上

寅三月

三浦竜次郎 印

畔柳丈之進殿

申上置候覚

先達而被仰渡候宇佐美彦四郎・三浦竜次郎拝領屋敷地境之儀一同為立合地面相改候上談合仕候処、表間口之方者五寸彦四郎方より竜次郎方江返地、裏間口九寸六分者同人方より彦四郎方江返地之積り、尤當時双方共建家御座候間追而普請之節引去可申趣熟談仕候

一、表間口三浦竜次郎方江宇佐美彦四郎より五寸返地之義者、同人東境杉本彦次郎与申者地面も右之節為立合相改候処、拝領之間数より五寸余伸居候間其訳柄を以掛合候処、彦四郎方江返地可致与申聞候、乍去是亦建家有之候間、追而普請之節引去返地可仕趣証文為取替申候、彦四郎方江右之返地有之候得者同人与竜次郎与之地境ニ而五寸返地ニ相成申候積り、勿論前条之為取替証文面ニ茂其旨相認メ熟談仕候、依之此段申上置候、以上

寅九月

組合
桜井甚五右衛門
藤村栄太郎

天保十三寅年十月

御届申上候覚

私養祖父三浦七歳時代天保二卯年十二月中御組宇佐美彦四郎より奉願、私拝領屋敷本郷元町大繩之内右地面裏間口之方三尺余も右彦四郎地面内江建込ニ相成候趣申上候ニ付、地論ニ相成候処

格別之以 思召町内世話役并組合之者江取扱被 仰付候ニ付双方一同立合之上地面相改、表間口之儀者當時私方ニ而伏置候同合下水半地境ニ相極り治定仕候、裏間口之儀者九寸六分程私方より彦四郎方江返地之積り、追而双方普請之節引去り返地可仕旨証文為取替、町内世話役三橋啓五郎・組合鈴木健平取扱を以熟談仕偏ニ御憐愍之程難有奉存候、依之此段奉申上候、以上

天保十三寅年十月

三浦竜次郎 印

畔柳丈之進殿

御届申上候覚

御組三浦竜次郎養祖父七藏相勤罷在候節私拝領地面地境之儀ニ付、天保二卯年十二月中奉願置候一件此度組合桜井甚五右衛門・藤村栄太郎・町頭三橋啓五郎江取扱之儀被仰渡、当三月十九日双方立合之上相改私地面不足之所表間口ニ而五寸程、裏間口ニ而九寸六分程取扱之者取計を以熟談之上、此度返地ニ罷成候処當時建家も御座候ニ付、追而普請之節建家引下ケ雨落之所も定之通相除キ可致家作旨、為後日双方証文為取替相済難有仕合奉存候、此段御届申上候、以上

天保十三寅年十月

宇佐美彦四郎 印

畔柳丈之進殿

(朱書)
「二百三拾六」

天保十三寅年十月十一日撰津守殿御渡四郎殿御達

寛政曆差錯有之付而、今度於京都改曆宣下曆号定陣儀被遂行、新曆号天保壬寅元曆与被立候、依之来々辰年より新曆頒行之事候

右之通可被相触候

寅十月

(朱書)
「二百三拾七」

同年十二月 日当番所横山為次郎相達ス

一、来ル廿六日 権現様支干御相当御祝儀ニ付、御前夜より御清

ニ而紅葉山 御宮江 公方様 御参詣被 仰出候、服者熨

斗目半袴之事

同年十二月 日但馬守殿御渡大内藏殿御達

来ル廿六日 東照宮 御誕生日ニ候処、今年之儀支干茂相当ニ

付而紅葉山 御宮江 御参詣被遊 還御以後為御祝儀御能被

仰付候ニ付、高家・雁之間詰同嫡子・御奏者番同嫡子・菊之間

縁類詰同嫡子・布衣以上之御役人、西丸共且法印・法眼之医師

見物被 仰付候間、熨斗目半袴着用六ツ時可登 城候

右之通可被相触候

十二月

来ル廿六日御能見物被 仰付候面々之内、服穢のものハ紅葉山

御宮 御参詣相済 還御以後登 城候様可達候事

十二月廿六日

御能ニ付表向六半時揃之事

来ル廿六日 権現様 御誕生日御支干御相当ニ付紅葉山

御宮江 公方様 御同参之儀前々 御長袴ニ而 御参詣之

御例ニ見合、此度 御長袴ニ而 御同参被遊候積り相心得、向々

江申達候様伊勢守殿江相伺候処伺之通被仰渡候、依之申達候事

十二月

中川勘三郎
遠藤鐘次郎

同年十二月 日小島半助相達承附いたし返上

御徒目付組頭江

来ル廿六日 権現様 御誕生日御支干御相当ニ付紅葉山

御宮江 公方様 御一同被遊 御参詣候節御供建・開場之

儀者、前々 御同参之節之通 公方様御供者御左之方江開

右大将様御供者御右之方江開候積り、且又御道具等之儀も

前々 御同参之節之通建・開仕候積り伊勢守殿江申上候、依之申

達候事

十二月

中川勘三郎
遠藤鐘次郎

(朱書)
二三百三拾八ノ上

天保十四年卯年正月 日撰津守殿被仰渡候段、三蔵殿被申渡旨前

田又三郎相達ス

一、御目付方之者共江老ケ年両度宛被下候御役羽織之儀、近来地怔染

方等不宣一統及迷惑候哉ニ相聞候、右者最前頭共見分被致候上

之儀ニ者可有之候得共数多ニも候得者、自然不行届儀も有之哉畢

竟職方之者共不垢故ニ候、向後地怔等精々吟味致し相渡候様可

被致候事

右之通御細工所江申渡候間可得其意候、且又其方共支配向之内

ニも御役羽織之儀ニ付而者、如何之取計致候者も有之哉ニ相聞候

間、以来左様之儀無之様急度可被申渡候事

(朱書)
「同下 三百五十二与可見合事」

主膳正殿御渡

享保四亥八月

一、拝領屋敷を他江貸置、自分者外ニ罷在候儀者有之間敷事ニ候間、

其旨可相心得候、右屋敷ニ罷在候而屋敷之端を親類ニ貸置住居為

仕候儀者不苦候、他人江貸置候儀者可為無用

一、役屋敷杯江引越罷在候者拝領屋敷を他江貸置候儀者不苦候、然共

他之もの江家作為致候儀者可為無用候事

一、幼少之もの一類共江引取置、跡屋敷外江貸置候儀者不苦候事

一、町屋敷者勿論之儀、与力・同心杯之屋敷前々より貸来候もの者格

別、其外右類之輕キもの共屋敷貸候儀者、頭支配江相達差図次第

貸可申事

一、火事逢候もの当分普請難仕候ニ付明置、外ニ住居候儀者不苦候、

右屋敷を外江貸候儀者可為無用事

右之通ニ付而屋敷借り罷在候もの借地引払候儀者、来年中ニ可限候

同年十月

拝領屋敷自分住宅いたし、屋敷之端を親類江貸置候儀者不苦候間、最前相触候通ニ候、就夫親類之遠近杯相尋候ものも有之候ハ、遠キ続キニ而も世話ニ致親類を差置候事不苦候、縁者も同断ニ候、たとへ近キ親類ニ而も地代等為出貸候儀者不仕筈ニ候

右之通享保之度万石以下之面々江相触候処、篤与不相弁もの有之哉近来猥ニ相成、幼少ニも無之面々拝領屋敷を他江貸置、自分者外ニ罷在、或者拝領屋敷之内を多人数江貸置候ものも有之哉ニ相聞如何之事ニ候、向後享保度相触候趣堅く相守候様可致候、尤頭支配之面々も厚心得、組支配之ものより貸地届申出候節者、能々遂穿鑿猥ニ承置申間敷候、若触之趣等閑ニ相心得候ものも於有之者、嚴重ニ御咎可有之条可存其旨、尤式ヶ所持之もの自分致住居不申方屋敷を由緒有之もの江貸置候儀者不苦候
右之趣不洩様可被達候

(朱書)

「天保十四卯」正月廿九日

天保十四卯年二月 日撰津守殿御渡式部少輔殿御達五役承付返上
拝領屋敷貸地之儀ニ付今度相触候趣、頭支配ニ而夫々相糺候ニ付而者、急速引払候儀無抛差支候向も有之哉ニ相聞候ニ付、畢竟享保之度相達候趣年曆相立候事故不弁儀ニ可有之、右之類此節一時ニ相改候義可為難儀間、格別之御宥恕を以暫時御猶予有之候ニ付、速ニ可油断相改候様可致候、乍然御医師其外町屋敷計被下

候向々并いまた屋敷無之もの等借地之儀者無抛事ニ付、由緒無之もの者右之訳柄申聞貸地之儀相伺候様可致候、且又和漢文学之もの・武芸師範之もの其外医師之類者頭支配ニ而相糺、如何敷筋も不相聞分者由緒無之候とも貸地之儀不苦候間、是又相伺候様可致候、右之趣今般猶又被 仰出候間、其段最前相触候向々江可被達候

二月

(朱書)
「三百二十九」

天保十四卯年五月十五日撰津守殿被仰渡候段、寛十郎殿立合近江守殿被申渡御書付承付返上

御目付江

畔柳丈之進組

御中間

関根市太郎

銀拾五枚

右百歳迄御奉公出精相勤至而壯健之趣相聞一段之事ニ候、此度

日光 御参詣も被為 濟候ニ付、御祝儀被下之

五月十五日

(朱書)

「三百四拾」

天保十四卯年五月十九日掛り十五郎より差越ス

御中間頭

御小人頭
御駕籠之者頭

来ル廿日上野 御参詣相濟、中堂・文珠楼其外被遊 御覽候ニ付 還御之節 御装束所本坊前中堂後より被為 入候積ニ付、同所ニ而御供相開、夫より凌雲院前通り、黒門外江御供相立可申旨、扨以前迄者新黒門之方江片寄扣罷在、其節布衣以上之御賄者黒門番所相渡候、以下者同所扣罷在御場所江相廻し可申候、尤扨以前御徒目付・御小人目付差引御供相立可申候、且別紙立開繪 図面申達候事

五月十九日

佐々木近江守
松平式部少輔

一、来ル廿三日上野本坊江被為 成候節、御道筋并御作法等之儀、諸事御規式 御成之節之通り

一、衣服之儀御先江相揃候布衣以上者染帷子長袴、其外勤番御供之分者染帷子半袴着用之事

一、御先勤之面々供廻り新清水護国院江相扨、尤御徒押・御小人押差引可致事

御供同勢場

布衣以上

布衣以下

右之通可被心得候、尤御徒押・御小人押差引可致事

御料理被下候宿坊

布衣以上

青竜院

御目見以上

堅明院

(御目見以下)

元覚院

(諸組与力・同心
其外共)

涼泉院

(御中間以下
末々迄)

等覚院

右之通可被心得候、尤本坊相詰候面々者末々迄も直ニ於本坊被下候事

五月廿二日

佐々木近江守
松平式部少輔

(朱書)

〔三百四拾壹〕

天保十四卯年七月廿六日御扣共三通差出候処、即刻伊勢守殿御附札を以被仰渡候段、庄兵衛殿立合右近殿被申渡書面繕付返上

覚

畔柳丈之進組

西丸御中間目付

小磯清九郎

去寅二月九日番遠慮
被 仰付罷在候

右清九郎儀甥御中間頭浅井七三郎組御中間小永井長三郎儀、昨廿五日遠島被 仰付候旨阿部遠江守申渡候段相届申候、依之清九郎儀此上之儀奉伺候、以上

御中間頭

畔柳丈之進

卯七月廿六日

御附札

〔番遠慮可被申渡候〕

覚

去二月九日

御目見遠慮之格
被 仰付罷在候

畔柳丈之進組

御中間

小磯龜次郎

天保十四卯年八月二日

畔柳丈之進組

西丸御中間目付

小磯清九郎 印

右龜次郎從弟御中間頭淺井七三郎組御中間小永井長三郎儀、昨廿五日遠島被 仰付候旨、阿部遠江守申渡候段相届申候、依之龜次郎儀此上之儀奉伺候、以上

卯七月廿六日

御中間頭

畔柳丈之進

(朱書)
「三百四拾貳」

〔五役頭江

御附札

〔御目見遠慮之格可被申渡候

覚

一、私実方兄孫十郎養子小永井長三郎儀、去廿五日遠島被 仰付家作欠所相成候ニ付、長三郎養母り多并妻ふさ右兩人共、浅井七三郎殿御組天笠重平・石井徳兵衛より被引渡候間、私方江引取申候、此段御届申上候、以上

卯八月二日

小磯清九郎 印

畔柳丈之進殿

(朱書)
「三百四拾三」

引取申一札之事

一、元御中間小永井長三郎儀、此度御吟味之上去月廿五日遠島被 仰付候旨、阿部遠江守殿於御役所被仰渡候間、長三郎妻ふさ・同人養母り多右兩人共、実方叔父之続を以今二日拙者江御引渡有之、兩人共慥ニ受取申候、為後日入置申一札仍如件

天笠重平殿
石井徳兵衛殿
並木彦次郎殿

濡御手当之儀者御定式遠 御成都而 御成之節者被下置、御延引相成候共御道具等相廻り候ハ、被下置、其節者御先勤之儀者不相成候 御成有之候得者御供・御先勤之無差別被下、其外御馬牽人奥向聞濟有之候ニ付、被下候人数之儀者不同様可致、右之外一切不相成候事

(朱書)
「天保十四卯」八月七日

〔天保十四卯〕八月七日

榊原主計頭
桜井庄兵衛

天保十四卯年八月廿八日御扣共三通差出候处、即刻但馬守殿御附札を以被仰渡候段、庄兵衛殿立合三五郎殿被申渡、書面繕付返上

覚

畔柳丈之進組

御中間頭役持

本郷丸山菊坂町用金地

小金井長三郎

右長三郎持用金地昨廿七日夜西下刻地面町人共貸長屋内より出

火仕候処、類焼者無御座候得共不念之段奉恐入候旨申聞候、依之
長三郎儀押込置可申哉此段奉伺候、以上

八月廿八日

御附札

御中間頭

畔柳丈之進

不及押込候

(朱書)

「三百四拾四」

天保十四卯年八月廿五日中午勘三郎殿江差出ス

七拾歳、五拾年以上勤之者

覚

御中間頭

畔柳丈之進組

御中間御供組頭

高拾五俵

老人扶持

御譜代之者

佐藤定藏

卯七拾六歳

右定藏儀寛政元酉年養父家督被下置、当卯年迄御奉公五拾五年

相勤罷在候

一、倅清之助儀部屋住^二而御抱入相成、相勤罷在候

高式拾俵

老人扶持

御譜代之者

同人組

御旗指之者

関根市太郎

卯百歳

右市太郎儀安永三年御抱入被 仰付、天保六末年五月老年迄
数年無懈怠相勤候^二付御譜代被 仰付、同十二年十一月及高
年候迄出精相勤候^二付御加増五俵被下置、当卯年五月日光 御

参詣被為 濟候為御祝儀白銀十五枚被下置、当卯年迄御奉公
七拾年相勤罷在候

一、倅与作儀部屋住より御抱入被 仰付相勤罷在候処、病氣^二付退役

仕父手前^二罷在候

一、孫三吉儀部屋住^二而組明跡江御抱入相成、相勤罷在候

同人組

新土戸番

高拾五俵

老人扶持

御入人離候

御抱入之者

小宮山十郎左衛門

卯七拾五歳

右十郎左衛門儀天明四辰年御抱入被 仰付、当卯年迄御奉公六

拾年相勤罷在候

一、倅太郎右衛門儀部屋住より御抱入相成、相勤罷在候

同人組

大奥御台所口前御門番

高拾五俵

老人扶持

御譜代之者

吉田与右衛門

卯七拾五歳

右与右衛門儀寛政三亥年御目付支配無役より御入人被 仰付、

当卯年迄御奉公五拾三年相勤罷在候

一、養子長次郎部屋住より御抱入相成、相勤罷在候

高拾五俵

老人扶持

御譜代之者

同人組

二丸御台所脇御長屋御門番

斎藤与八郎

卯八拾五歳

○ 書面与八郎儀病氣^二付当六月十五日隱居・家督伺并御褒
美願共差出申候

右与八郎儀寛政元酉年養父家督被下置、当卯年迄御奉公五拾五年相勤罷在候処、病氣ニ付引込罷在候

一、倅九郎次義部屋住より御抱入相成、相勤罷在候

同人組

御簾指之者

高拾五俵

忝人半扶持

御譜代之者

熊沢新八郎

卯七拾歳

右新八郎儀寛政四子年御抱入被 仰付、当卯年迄御奉公五拾式年相勤罷在候

一、倅重五郎儀部屋住より御抱入相成、相勤罷在候

松永伴右衛門組

御中間目付

高拾五俵

忝人扶持

御譜代之者

高橋清八

卯七拾九歳

右清八儀天明元丑年部屋住より組明跡江御抱入被 仰付、寛政十二申年父家督被下置、当卯年迄御奉公六拾三年相勤罷在候

同人組

御簾指之者

高拾五俵

忝人扶持

御譜代之者

秋元作左衛門

卯七拾三歳

右作左衛門儀安永五申年十月父跡式被下置、幼年ニ付御目付支配無役罷成、寛政三亥年三月御中間江御入人被 仰付、当卯年迄御奉公五拾三年相勤罷在候

浅井七三郎組

御長屋御門番

高拾五俵

忝人扶持

御譜代之者

代々御長屋御門番
相勤候家筋御座候

御中間組頭
梶田伊左衛門

右伊左衛門儀明和八卯年四月部屋住より御抱入相成、当卯年迄御奉公七拾三年相勤罷在候

一、倅宇作儀部屋住ニ而御抱入相成候処病死仕、当時嫡孫承祖徳三郎儀部屋住より御抱入罷成、相勤罷在候

一、天保六未年四月数年無懈怠相勤候ニ付、為御称美金三両被下置候

一、倅重五郎儀部屋住より御抱入罷成候処病氣ニ付御暇奉願、惣領除仕父手前罷在候

同人組

触番之者

高拾五俵

忝人扶持

御譜代之者

平山仁兵衛

卯八拾四歳

右仁兵衛儀安永七戌年五月御目付支配無役より御中間江御入人被 仰付、当卯年迄御奉公六拾六年相勤罷在候

一、倅卯八郎儀部屋住より御抱入罷成候処病氣ニ付御暇奉願、惣領除仕父手前罷在候

一、嫡孫承祖兵作儀部屋住ニ而御抱入罷成、当時奥御長屋御門番相勤罷在候

一、仁兵衛儀数年無懈怠相勤候ニ付、天保十亥年二月為御称美金三両被下置候

高拾五俵

忝人扶持

御抱入之者

同人組
御中間目付
小室源四郎

卯七拾七歳

右源四郎儀天明六年三月父又市御中間相勤罷在候節、次男二而別規御中間江被一召抱、当卯年迄御奉公五拾八年相勤罷在候一、倅鉄三郎儀部屋住二而御抱入二相成、相勤罷在候

高拾五俵

老人扶持

御抱入之者

同人組

御旗指之者

並木彦次郎
卯七拾三歳

右彦次郎儀寛政四子年八月次男より御抱入罷成、当卯年迄御奉公五拾弍年相勤罷在候

一、倅才兵衛儀部屋住より御抱入罷成、西丸御中間目付相勤罷在候

高拾五俵

老人扶持

御譜代之者

代々御長屋御門番
相勤候家筋御座候

同人組

御長屋御門番世話役
山本長六
卯七拾弍歳

右長六儀天明八申年七月部屋住より御抱入相成、当卯年迄御奉公五拾五年相勤罷在候

一、倅長七儀部屋住より御抱入罷成、御長屋御門番世話役相勤罷在候

右之通御座候、以上

卯八月

御中間頭

畔柳丈之進
松永伴右衛門
浅井七三郎

天保十四卯年閏九月 日御扣例書未例之通差出御懸合相成候処、町会所金返納殘金此方引請皆済致候義二候ハ、取戻願差出候とも差支無之旨下ケ札を以挨拶有之

町奉行衆

御勘定奉行衆

御勘定吟味役衆

拝領大繩町屋敷

本所永倉町

五拾九坪六合式勺

御徒押

高部市蔵

右市蔵儀此度武士屋敷御引替二相成候二付、御中間大繩町屋敷之儀二御座候間取戻願差出可申奉存候、然ル処右地面会所金借用有之、右殘金之儀者此方二而引請皆済可致旨申上取戻之儀可奉願奉存候、尤文化二丑年六月元御中間江守覚太夫上り地之節、会所金返納皆済迄余人江被下候義御見合有之候積、御伺済之趣を以町奉行衆・御勘定奉行衆より御達有之、其節も此方二而引請返納之積申上願之通組江御返シ相成候間、此度も右之通仕度奉存候、御差支之儀も無御座候哉、此段町奉行衆・御勘定奉行衆・御勘定吟味役衆江御掛合被下候様仕度奉存候、以上

卯閏九月

御中間頭

右之通御中間頭申聞候間及御掛合候、以上

卯閏九月

卯十月廿九日御扣共三通例書老通相添差出候処、同十二月五日安芸守殿御附札を以被仰渡候段、四郎殿立合半左衛門殿被申渡

御中間大繩屋敷取戻之儀
奉願候書付

月番 中川勘三郎
坂井右近

(朱書)
「三百四拾六」

拝領町屋敷

本所永倉町

五拾九坪六合式勺

御徒押

高部市藏

殿被申渡

御目付江

御中間目付

桜井甚五右衛門

右市藏儀此度武士地拝領被 仰付町屋敷上り地相成申候、右者
御中間大繩屋敷ニ御座候間、先格之通御中間組江御返被下候様
奉願候、以上

卯十月

御中間頭

下ケ札

○ 本文市藏拝領町屋敷上り高町会所金借用有之候ニ付、
殘金返納此方引請皆済可為仕候間、取戻之儀奉願候
而も差支無之哉之旨、町奉行・御勘定奉行・御勘定

吟味役江及懸合候処差支之儀無之旨申聞候間取戻願
之通被 仰付被下候様仕度奉存候

御附札

可為願之通候、尤町奉行可被談候

例書

御徒目付

神谷昇太夫

右昇太夫儀此度武士地拝領被 仰付町屋敷上り地相成候処、御

中間大繩屋敷ニ付天保八酉年十一月取戻之儀申上候処、同年同

月願之通元組江御返シ被下候旨肥後守殿被仰渡候

卯十月

御中間頭

(朱書)
「三百四拾七」

覚

一、赤坂溜池端明地之内江此度馬場大的場新規出来ニ付、諸向一統乘
込様之積ニ相成、尤毎月一之日布衣以上御役人之面々計定日相
立、余者御直参・陪臣勝手次第不込合一日申合稽古可仕旨、撰津
守殿被仰渡候、依之申達候、以上

閏九月

桜井庄兵衛

(朱書)
「三百四拾八」

御目付衆

御納戸頭

功類御請取方之儀曲尺ニ而尺寸法御断御差出有之候様、去ル亥
年中御達申置候処諸向区ニ而却而混雜致候ニ付、以来先前之通
御断御差出可被成候

右之趣撰津守殿江申上御達申候、以上

前書之通申越候ニ付為心得申達候

(朱書)

「天保十四卯」十月

桜井庄兵衛
中川勘三郎

(朱書)
「三百四拾九」

天保十四卯年十月 日西丸御使持参承付返却

黒鍬之者頭
御中間頭
御小人頭

右大将様以来四時之御供揃ニ而西桔橋より 御本丸江被為

成候節、玄猪より三月晦日迄者 御本丸御時計計五半時打五寸廻

り之附人戻り次第、此御方御時計計ニ不拘直ニ御挟箱出、四月朔

日より玄猪迄者右同断四時江四寸前之附人戻次第御挟箱出候御

手続ニ相成候旨、右之趣一統心得居候様頭取黒川豊後守為心得

申聞候、此段為心得申達候事

十月

(朱書)
「三百五拾ノ上」

天保十四卯年十月 日当番所組頭高倉助五郎より差越ス、承付同

人を以返上

覚

五役之支配向より転役被 仰付追々昇進いたし、大繩組屋敷ニ

罷在不相当之もの有之候ハ、取調可被差出候、以上

十月

桜井庄兵衛
中川勘三郎

(朱書)
「同下」

一、黒鍬之者頭・御中間頭・御小人頭より組々大繩屋敷等之儀ニ付

品々取調被差出候儀も有之候処、唯今古格之仕来改候而者却而混

雑可致候間、前々之通定置、差向不相当之儀も有之候共頭々ニ而

非分無之様取調、廉立候儀者伺之上取計候上可被申聞候、少事之

儀者取扱候上可被申聞候

卯十月十九日

桜井庄兵衛
中川勘三郎

(朱書)
「三百五拾壹」

天保十四卯年十一月 日廻状之内

一、御中間目付・御小人目付・御駕籠之者、以来御宅誓詞相願節者

御部屋江直ニ差出候様永喜申聞候事

(朱書)
「三百五拾貳 三百三拾八番の下与組合」

天保十四卯年十一月廿三日但馬守殿御渡、半左衛門殿御達

拝領屋敷貸地之儀ニ付相触候趣も有之候ニ付而者、住居等差支難

儀致候ものも不少哉ニ相聞候、畢竟貸地・借地等之儀如何敷筋無

之様ニとの御趣意ニ候間、拝領屋敷を貸置自分借地致し候義無

之、無抛訳柄ニ而外ニ如何敷儀も不相關從來相濟候分者、頭支配

二而前々之通貸地・借地等承届候様可致候、勿論前々より難相成儀并如何敷筋も有之ニおゐてハ急度御沙汰可有之候条、心得違無之様可致候

右之趣最前相触候向々江不洩様可被達候

十一月

(朱書)
「三百五拾三」

天保十四卯年十二月朔日御達

御中間頭
御小人頭 中
御駕籠之者頭

公方様 御同刻之御供揃ニ而吹上御庭被為 成仙台馬・南部馬
右大将様

上覽之節、前々御供御目付并御徒目付御裏御門外より駆抜紅葉山下御門外迄罷越 公方様御先之御様子見取候処、以来者其儀ニ不及、別紙之通西丸奥向江掛合相濟候間、書面之通御先并御供之者相心得可申候事

一、山王祭礼之節者前々之通相心得候事

十一月

別紙

河野権右衛門

仙台馬・南部馬 上覽之節、御同刻御供揃ニ而 公方様ニも西桔橋より被為 成候節 右大将様御先御供紅葉山下御門外迄罷越候節 公方様ニも 出御之御様子ニ候ハ、御先御供之分行形ニ下ニ居 公方様 通御相濟御引続被為 成候ニ付御先立候儀者奥向御供ニ随ひ相立候事

公方様吹上御庭江被為 成 右大将様ニ者蓮池御門通りニ丸・三丸江被為 成候節 御成 還御共御同時ニ相成蓮池御門外ニ而西桔橋御見通し相成候節 出御之御様子ニ候ハ、前条之通御先御供之者行形ニ下ニ居 公方様 通御相濟奥向之御供ニ随ひ 御先立候事

右之通相心得可申候事

十一月

河野権右衛門

(朱書)
「三百五拾四」

天保十四卯年十二月十一日御達

一、遠 御成之節 御之御挑灯是迄若年寄衆・御側衆之跡江建候処、此度 御本丸ニ而若年寄衆・御側衆之上江相建候様御取極メニ相成候間、此御方ニ而も御同様御挑灯相建候様 御本丸同役松平式部少輔申聞候

右之通相心得、御中間頭・御小人頭・御駕籠之者頭江可申渡候事

十二月

河野権右衛門

(朱書)
「三百五拾五」

五役頭江

今般御勝手向之儀ニ付厚被 仰出候御書付之趣、銘々心力を尽し向々限り十分ニ取調可被申出候、万一未熟之儀并彼是謗儀いたし候者於有之者嚴重之取扱ニ可及候、如斯御時節銘々忠儀厚薄も相頭候儀、殊ニ当御場所之儀者諸向見合ニ茂相成候間、一日

も早く取調可申上事ニ付、其向頭々支配寄合いたし来ル廿日限
取調可被申聞候

但支配向末々ニ至迄心附候向有之候ハ、聊無遠慮頭々江可
被申出候

右之趣不洩様可被申渡候

(朱書)

「天保十四卯」十二月十五日

桜井庄兵衛
中川勘三郎
松平四郎
坂井右近

同月十八日西丸御使組頭持参、承付返上

(朱書)

「前文 右御本丸方御達丸写ニ付留略ス」

右之趣不洩様可被申渡旨 御本丸ニ而申渡候、西丸之儀も御同
様御入用筋之儀勿論、其外面々心附候儀者聊も無遠慮取調、来ル
廿五日限申出候様西丸支配向并御当所御厩迄も可被申渡候

十二月十八日

林 内蔵頭
永井真之丞

(朱書)
「二百五拾六」

卯十二月廿一日庄兵衛殿御達

御中間頭 差出之内
御小人頭

例年十二月定式請取高之内

右大將様

一、熨斗目小袖御先練之もの着候分

但綿代共

一、綾縞小袖 御中間
御小人 組頭着候分

右者享保・寛政之御例ニも無之、御近例を以被下置候儀当時紅葉
山 御宮江 御参詣ニ付被下置候儀故、来辰年より 御本丸
御分者隔年被下置候積りを以 右大將様御分者五ヶ年目御断
差出可被申候

一、例年六月十二日定例受取高之内

一、茶縮緬袷羽織

御中間 組頭着候分
御小人

御本丸

御中間目付

御小人目付

西丸

御中間目付

御小人目付

御中間押

御小人押

一、黒加賀絹袷羽織

右之もの着候分雨天之節者格別之御手当金も被下置候儀ニ付、
来辰年より暮計被下置、六月之分者不被下置候事、例年十二月定
式御中間方・御小人方御番所ニ而損引替之積請取候分

一、手桶

一、搔器

一、次棕櫚箒

右者隔年ニ御断差出新キ請取可申候、若御差支之儀も有之候
ハ、右三品ニも不限組々入用手当等可被致候、且勤筋極難渋之
御番所々々江者乍少分も組々より手当いたし、御取締専要心附

候様頭々より可被申渡候

- 一、濡御手当金之儀者前々 御成之節ニ御行列御供建之内 御前辺傘不相用者共江被下置候訳柄を以、右故厚相心得諸事寛政度以来之振合を以 御城内外遠 御成之節々出方人数高取極被申聞置、御入用筋ニ相拘り候義不取締無之様可被致候、右之趣五役頭々より組之もの江可被申渡候
- 一、今般被 仰出候御趣意之趣厚相心得、五役頭々より取調被差出候分者諸向江引合急ニ仕兼候間、前文御中間・御小人之廉ニ而相減候趣を以、其向限り省略いたし候様取調可被申聞候

右之趣西丸御目付中江も申談之上相達申候事

〔三百五拾七〕

弘化元辰年正月 日御達

- 一、下渋谷村江炮術角場御取建相成、御持頭堀田主税組与力齋藤雲八郎江御預可被仰付、二七之日者同人稽古日与相立、其余者諸向打込稽古場ニ相成候間、布衣以上・以下御役人其外御番方・小普請 御目見以下之面々并陪臣等ニ而も勝手次第稽古可被致候、尤玉目之儀者頼付膝台ニ候ハ、式百目迄不苦、仕掛打者不相成、毎年四月より七月中迄稽古之積、日限等之儀者雲八郎申談不込合様稽古可被致候

右之趣主膳正殿被仰渡候、依之申達候、以上

正月

桜井庄兵衛

〔三百五拾八〕

同二月 日当番所小野伝之助相達ス

- 御用傘猥ニ相用申間敷事ニ候処、近年平常相用申間敷御用ニも相用、或者急雨之節杯相用候義も有之由、如何之事ニ候、以来者先規之通自分傘相用、御用傘者相用申間敷候、右之趣急度可被申渡候

二月

桜井庄兵衛
中川勘三郎
松平四郎
坂井右近

〔三百五拾九〕

弘化元辰年二月七日御部屋良格を以御下ケニ付、下ケ札いたし同人を以返上

奉願候覚

私儀本郷元町拝領屋敷住宅仕罷在候処、此度類焼仕候ニ付荒井林太夫組御中間目付西村吾平拝領屋敷本郷春木町壱丁目百三拾坪余之内、三拾坪余之処由緒も有之候ニ付、当分之内借地住宅仕度此段奉願候、以上

二月

御掃除之者頭
山崎又兵衛

書面御中間目付西村吾平よりも願出相違之儀無御座候

二月

御中間頭
荒井林太夫

(朱書)
二百六拾 二百七十三与組合

弘化元辰年二月廿一日西丸より達し来ル、右ニ付同廿二日組頭より差出候人数書西丸方懸り御徒目付江遣ス
近々小金井筋江 右大将様 御成之節高井戸村より 御早
召御沙汰ニ候、依之為心得申達候事

二月

河野権右衛門

右 御早召ニ付

一、御成掛ケ 御召出所上高井戸村百姓平五郎前江 御召御次

御馬并手馬共

凡五拾五疋程

御召替所吉祥寺村名主十郎左衛門方江 御召御次御馬并手馬

共

凡三拾疋程

一、還御之節 御召出所吉祥寺村名主十郎左衛門方 御召御次

御馬并手馬共

凡五拾五疋程

御召替所上高井戸村百姓平五郎前 御召御次御馬并手馬共

凡三拾疋程

右之ヶ所江御馬手馬相廻り候ニ付、牽人人数早々可申聞事

二月

河野権右衛門

人数書可認入積、明ヶ置

同二月廿三日西丸御使を以申来ル、承付いたし西丸懸り江返却

御中間頭江
御小人頭

右大将様小金井筋江 御成之節定例 御成御道具之外御当朝境

新田 御先江相廻候御道具之分

奥より出候分

一、黒塗御挟箱 一、御茶弁当 一、御召筒式挺

一、御日傘 一、御雨傘 一、御笠

一、御床机 一、御水篋筒 一、御野屏風

一、御草履御草鞋包 一、糸立包籠

表より出候分御替御道具

一、御鏝鍮

御早召之節表向騎馬御供

一、御目付 壺 人

右口附上高井戸村 御召出境新田 御召留り 還御之節吉祥寺

村名主十郎左衛門前・中野村年寄今右衛門前四ヶ所江相廻り候

事

右之通可相心得候事

二月

河野権右衛門

(朱書)
「三百六拾壹」

弘化元辰年二月 日廻状

一、近々府中筋江 右大将様遠 御成御沙汰ニ付、明日奥向衆為乗
様被相越候ニ付、御馬牽人御中間百六拾人罷出候趣、尤御馬数四
拾疋之由老疋四人掛り之積、且又牽人之者前夜より罷出候義ニ
付、去卯年三月廿一日同所江御老・若方乗様之節も木錢払之趣ニ
付、此度も右之通取扱候間御聞置可被下旨、御当番六郎左衛門
殿江申上御承知之旨被仰聞候間、其段定蔵江申渡ス

(朱書)
「三百六拾貳」

弘化元辰年二月廿八日御小人目付佐助持参世話役江申渡承付返却
町奉行所出役御小人目付相止候旨、大炊頭殿江鳥居甲斐守・鍋
島内匠頭より申上候旨ニ付、御小人目付以来出役為致候ニ不及
候、是迄差遣候出役御小人目付江其段可申渡事

二月廿八日

桜井庄兵衛

(朱書)
「三百六拾三」

弘化元辰年三月三日御届書老通御当番江御部屋長養を以差出ス

覚

三月二日より同十一日迄

御中間頭

娘之忌

萩原又作

右又作娘昨二日未刻病死仕候ニ付、忌中御届申上候、以上

三月三日

御中間頭

浅井七三郎
荒井林太夫

(朱書)
「三百六拾四」

弘化元辰年三月三日御当番六郎左衛門殿江林太夫より差出ス

覚

享保度

御中間御定人数

五百四拾三人

寛政度

同 御定人数

五百五拾五人

天保九戌年過人式拾人被 仰付

同 御定人数

五百七拾五人

(朱書)
「当辰二月十五日迄分限高
御中間惣人数

五百五拾式人」

右之通御中間惣人数寛政度ニ見合候得者三人不足ニ御座候処、
此度別紙名前之者御支配無役より四人御中間江御入人被仰付被
下置候様奉願候、一躰無役之者元筋江御入人相願候義者宝曆度
以来被仰渡之御趣意も御座候間、応対吟味仕候処何レも御奉公

可相勤年来相応之者ニ付御入人奉願候、且是迄無役之者多人數ニ而御入人相願不申、右ニ付享保度以後新規御抱入過人も被仰付候、然ル処追々御時節柄敵重被 仰出之御主意相守、此度御奉公相願候者御中間御譜代筋目之者ニ御座候間、前書奉申上候寛政度御定人数ニ老人相増候得共、四人共御中間江御入人被 仰付被下置候様仕度奉願候、左候得者向後無役ニ罷在候もの共御奉公出為相願候励之為ニも相成可申哉奉存候、此段奉願候、以上

三月

別紙

御中間頭

御目付支配無役

武井道太郎

辰十七歳

同

茂七三郎養子

浅井作次郎

辰二十七歳

同

三之助養子

伊藤半三郎

辰二十五歳

同

定之助養子

杉浦斧次郎

辰二十九歳

右道太郎儀者無役より御中間江御入人相願申候、浅井作次郎・伊藤半三郎・杉浦斧次郎右三人者家督奉願直ニ御中間江御入人相願候者ニ御座候

三月

御中間頭

〔朱書〕
「三百六拾五」

弘化元辰年三月廿四日但馬守殿桑山六左衛門を以御下ケニ付、委細下ケ札いたし差出候様御部屋祐守を以被遣候ニ付、翌廿五日下ケ札いたし返上

覚

御普請方下奉行出役

橋本恵次郎惣領

萩原又作組御中間

橋本佐吉

右佐吉儀父恵次郎御中間目付相勤候節、天保九戌年三月部屋住より御中間ニ御抱入相成、其後天保十三寅年三月廿一日父恵次郎御普請方被 仰付、同年十月十七日御普請方改役被 仰付直ニ御普請下奉行出役被 仰付

右之通父御取建相成候後も其後御中間相勤罷在候儀、全く別家ニ相成候訳候哉之事

但右之類元濟之定等有之事ニ候哉之事

御書面恵次郎惣領橋本佐吉儀又御中間目付相勤候節、部屋住より御中間御抱入被 仰付、其後父御取立被 仰付候得共其儘為相勤候義、右者宝曆二申年五月柳田安右衛門御小人より御駕籠頭被 仰付候節倅直次郎義御小人相勤罷在候処、是迄之通御小人為相勤度旨相願候処、同年七月願之通其儘為相勤可申旨御目付依田平次郎・角南主膳申渡有之、右之例を以是迄其都度々々願等も不仕御取立相成候者之倅共、其儘引続御中間・御小人為

相勤罷在候義者從來之儀ニ御座候、且佐吉儀別家ニ相成候義ニ者無御座候、父家督被下候節者取來御切米御扶持方者上り右明キ御切米御扶持方を以、同組御中間倅共之内御抱入奉願候義ニ御座候

辰三月

御中間頭

萩原又作

(朱書)
「二百六拾六」

弘化元辰年四月十一日御達

御中間頭江

一、明後十二日吹上於御花檀馬場布衣以上并寄合之面々馬術 上

覽被 仰出候其節

口附御中間

百四拾八人

内組頭壹人ツ、

但乘馬 上覽相勤候向々七拾四人之積

右之人数当曉七半時矢來御門内江相揃候様可被申渡候、諸事掛

御徒目付差図次第相勤候様是又可被申渡候

一、乘馬之面々自分馬ニ而相勤候間、矢來御門外ニ而馬口附御中間銘

々請取候様可被致候事

右之趣可被申渡候事

辰四月

櫻井庄兵衛

中川勘三郎

松平四郎

覚

一、薄縁

六拾枚

右者明十三日於吹上御花檀馬場馬術 上覽ニ付口附御中間揃

所江相用候間、当曉正八時竹橋御門内山張番所江相廻候様御作事奉行方江御断被仰渡可被下候、以上

四月十二日

御中間頭

(朱書)
「二百六拾七」

御代官

小林藤之助手附

御普請役格

矢村寛太夫

辰八十二歳

実子惣領

小普請方当分仮役

矢村戸四郎

辰三十八歳

五人扶持

右寛太夫儀老衰ニ付隠居、元御中間筋御目付支配無役被 仰付、

家督者倅戸四郎江被下直ニ小普請方仮役被 仰付候旨、尤明後

十八日於当番所御代官より引渡候段高倉助五郎申聞候

弘化元辰

四月十六日

同月十八日主膳正殿御書付右近殿被遣候旨当番所前同人相達ス、

無役世話役近藤勝平立合之上御長屋御門ニ而戸四郎江申渡

御目付江

御目付支配無役

矢村戸四郎

右来巳八月迄是迄之通小普請方当分仮役相勤候様可被申渡候、

尤小普請奉行可被談候

覚

御目付支配無役
矢村戸四郎

右戸四郎儀父家督被下置直ニ御目付支配無役被 仰付、来巳年

八月迄是迄之通小普請方当分仮役相勤候様可申渡旨被仰渡候ニ
付其段申渡、小普請方改役里見源左衛門江引渡申候、依之申上

候、以上

四月十八日

御中間頭
無役世話役

(朱書)
「三百七拾」

覚

右者御中間御長屋御門・新土戸御門・大奥御台所前御門・御小
人方中之口・御納戸口都合五ヶ所分焼失仕候ニ付、新規受取申度
奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上
辰五月
御中間頭
御小人頭

(朱書)

「三百六拾八」

弘化元辰年五月十日 日廻状之内

一、御本丸御納戸口番打込申合、双方御差支ニ不相成様可相勤旨庄

兵衛殿・勘三郎殿被申渡候、右ニ付勤方之儀者御小人方ニ而日々

御本丸江式人ツ、西丸江老人ツ、西丸御納戸口番之儀者

是迄之通式人ツ、都合日々三人ツ、勤番致候様御供組頭孫兵

衛為立合、御門番岩堀剛吾江申渡、御小人頭も右同様申渡ス

(朱書)

「三百六拾九」

御細工所江御断

月番 久須美六郎左衛門
佐々隼之助

覚

一、鉄行灯

但網掛小道具共

一、西丸御台所前御門
但 御本丸新土戸番より日々老人宛
一、同奥表仕切御門
一、同大奥御広敷御門
一、同裏締戸番

右御番所両丸打込相勤 御本丸より日々老人宛相詰可申候
右之趣同役惣出之上組頭彦兵衛江申渡候

(朱書)

「大炊頭殿」

御本丸奥表御普請所引払以後見廻り之儀申上候書付

御普請掛

七名

御目付江御断

御本丸奥表御普請所私共并掛り役人引払之節為取締、御
目付支配向江御場所并口々錠銘入共引渡、引払後ハ右支
配向昼夜共時々見廻り候様仕度奉存候、此段御目付江被

仰渡可被下候、以上

辰五月

右書面当番所小島半助より達、承付返却」

御門御断

覚

新土戸番

右者御炎上ニ付西丸兼勤仕候間西丸江被為 入候内、御納戸口番人奉願候通蓮池御門通り・西丸御裏御門昼計通行為致度奉存候、御門御断被仰渡可被下候様奉願候、以上

五月廿日

御中間頭

主膳正殿

御台所御断

覚

坂井右近

大奥御台所前御門番
同裏縮戸番
奥表塀仕切土戸番
新土戸番
朝夕夜共 老人ツ、

右者御炎上ニ付西丸兼勤仕候様被仰渡候ニ付、御納戸口番人之通日々老人宛増泊申渡候間、同様当分之内御台所被下置候様仕度奉存候、御台所江御断被仰渡可被下候、以上

五月廿日

御中間頭

御留守居衆

大奥御台所前御門番

同裏縮戸番
奥表塀仕切土戸番

右者御炎上ニ付西丸ニ被為 入候内者両丸兼勤候様申渡候間、是迄請取置候御留守居衆鑑札ニ而御門通行為致度奉存候、此段御留守居衆江被仰達可被下候、以上

五月廿日

御中間頭

右之通御中間頭申聞候、依之御達申候、以上

五月廿日

坂井右近

(朱書)
「三百七拾壹」

黒鍬之者頭
御中間頭 江
御小人頭
御駕籠之者頭

西丸ニ被為 在候内、別紙絵図面之通式重橋外江仮物出来候間
早々引移候様可被取計候事

五月

桜井庄兵衛
中川勘三郎

御徒押 御小人押 八畳 部屋	御徒目付 置 下 置 御本丸	御持鑓之者部屋 十六畳	御持鑓之者部屋 十一畳	御本丸 御小道具 御長刀 部屋十一畳	御本丸 御駕籠之者部屋 十六畳	西丸 黒鞆之者部屋 十六畳	御挑灯奉行部屋 十六畳	西丸 御小道具 御長刀 部屋十一畳
-------------------------	----------------------------	----------------	----------------	-----------------------------	-----------------------	---------------------	----------------	----------------------------

西丸ニ被為 在候内、私共組之者仮部屋式重橋外江出来ニ而早々引移候様被仰渡、則今日御作事方より請取只今為引移申候、依之申上候、以上

五月廿一日

四 役

御本丸
西丸
御持鑓之者
御小人方
御使組頭
御本丸
御長刀役
御小道具役

右者是迄御玄関前腰掛上式階ニ部屋有之候処 御本丸炎上ニ付、書面之役々式重橋外江仮部屋出来いたし昼夜相詰申候、然ル処非常之節病用并御城内外 御成之節、御門明キ以前より御使組頭部屋迄用向等御座候節差支申候間、西丸御玄関前御門夜中出

入御断御座候様仕度此段奉願候、以上

五月

御中間頭
御小人頭

(朱書)
「三百七拾式」

弘化元辰年六月七日御当番内蔵頭殿江絵図面相添差出入、絵図面扣者詰所江留置

御本丸炎上ニ付、西丸御小人目付部屋之儀御小人目付仮部屋ニ相成候ニ付、西丸御玄関前腰掛内御玄関番下部屋并傘置所西丸御小人目付仮部屋ニ可致旨庄兵衛殿被仰渡候ニ付、別紙絵図面之通仕切、羽目・刀掛・水遣所・棚類等出来候様仕度旨、西丸御小人目付相願候間、御作事奉行江御達被下候様仕度奉存候、依之申上候、以上

辰六月七日

御中間頭
御小人頭

(朱書)
「三百七十三 三百六拾与組合」

当二月小金井筋江 御成之節雨天之处格別骨折相勤候ニ付、別段為御手当金三拾両被下之
右之通可渡旨右京亮殿被仰渡候間可申渡候

右真之丞殿立合内蔵頭殿被申渡候、尤以来之例ニ者不相成旨御同人被申渡候、御金請取高等之儀者、去々寅年 思召を以被下置候例ニ見合取扱候積、志賀氏申合置候事

弘化元辰年十月十七日

(朱書)
「三百七拾四」

弘化元辰年十一月 日御達承付返上

黒鋏之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭
兩丸
御駕籠之者頭

右大将様二丸江 御逗留被為 入候節御道筋、西丸御台所御門より同所御裏御門通、蓮池御門・二丸銅御門・御同所御風呂屋口より被為 成 還御之節も御同様ニ候事

一、御簾中様ニも御道筋御同様ニ而御引続ニ付、往来其儘留切置可申候、尤御門々々・御番所向共都而 御本丸江 御入之節之通ニ候事

右之通主膳正殿江伺相濟候間依之申達候事

十一月

桜井庄兵衛
中川勘三郎
林内蔵頭

覚

御中間頭
御小人頭
御中間
御供組頭
御中間
御小人
御使之者

一、大手御門

一、内桜田御門

一、百人組

一、二丸銅御門

一、同所中仕切

一、蓮池御門

一、西丸御長屋御門

一、坂下御門

右者 右大将様二丸江 御逗留中書面之通御門々々御夜詰迄出入御断被仰渡可被下候、以上

辰十一月廿五日

御中間頭
御小人頭

山城守殿御渡

大目付江

西丸
御目付江

一、右大将様二丸 御逗留中毎月五日・廿一日西丸江之 御成無之候

一、右大将様二丸江 御逗留中遠 御成之節、山城守・西丸若年寄・御留守居詰有之候

右之趣向々江為心得可被達候事

十一月廿六日

五役頭江

来月二日 右大将様二丸江 御逗留ニ付来ル廿八日二丸為御殿番両三人少、相詰可申候之事

十一月廿五日

桜井庄兵衛
中川勘三郎
林内蔵頭

二丸 御逗留中御場狭ニ付諸席無之候間、諸向引膳(繕カ)之積主膳正殿被仰渡候間、依之申達候事

十一月廿七日

桜井庄兵衛
中川勘三郎
林内蔵頭

辰十一月廿九日内蔵頭殿江差出ス、御附札之上懸り佐藤慎兵衛を以御下ニ付御供組頭江相達承付取置

覚

二丸御台所脇御長屋御門

右者 右大将様二丸江 御逗留中、御老中方・若年寄衆御登城御退出之節、大御門開可申哉、又者其儘差置潜より御通行之儀与相心得可申哉

書面之趣者潜より御通行被成候間、是迄之通可被心得候

二丸御広敷御門

右同断ニ付二丸御広敷江御越之節、御門開閉之儀者是迄西丸御広敷御門之通相心得可申哉

書面之通可被心得候

右之通奉伺候、以上

十一月

御中間頭

辰十二月朔日庄兵衛殿・勘三郎殿・内蔵頭殿御名面ニ而達有之承付返上、両御門番江書面を以申達承付取置

御中間頭江

右大将様 御簾中様二丸 御逗留中、西丸御広敷御長屋御門番人・御同所七ツ口締戸番共、明二日より二丸江当番相勤候様申渡候、御支配筋之儀ニ付為御心得御達申候

十二月朔日

石河美濃守

辰十二月 日西丸御徒目付原田与三郎を以御達ニ付、御門番江申渡承付取置

御中間頭

御小人頭

右大将様二丸 御逗留中、御同所御長屋御門・御台所脇御長屋御門・新御門共御夜詰引ニ而締可申候事

一、御三卿方二丸御風呂屋口より御登 城有之候ニ付、新規出来之

御風呂屋口御通行ニ相成候間、御差支無之様可取計候事

十二月

桜井庄兵衛
中川勘三郎
林内蔵頭

辰十二月廿二日御達

御中間頭江

右大将様二丸 御逗留中二丸御長屋御門外井戸御同所御番所持

二相心得候様申達候事

十二月

桜井庄兵衛
中川勘三郎
林内蔵頭

弘化二巳年正月 日庄兵衛殿被申渡候旨、当番所組頭横山為次郎相達承付返上

御中間頭
御小人頭

右大将様 御入被為 在 還御色めき迄御供附御道具之分御玄関江差置候節々、御供相勤候御中間頭・御小人頭之内并御使組頭も附添守護いたし、持参御途中御玄関前辺迄諸家之家来其外混雜なる場所二者御中間・御小人・組持御番所番人共片寄候様、制声厳重ニ為相掛可申候、且右御道具類持人之儀者列を正し、聊も不行儀無之様精々可申渡候

右之趣者御供同役中江御道具御別条無之段、御中間頭・御小人頭より被申聞候事柄尚以来厚相心得候様、御供方ニ相拘候組々之者江不洩様可被相達候

巳正月

(朱書)
「三百七拾五」

巳正月十日当番所小野伝之丞相達ス、^(助力)承付返却

御徒目付組頭江

明十一日 右大将様 西丸江被遊 還御候ニ付、翌十二日西丸御簾中様

御目付并御支配向共引払候間受取可申候事

正月十日

桜井庄兵衛
中川勘三郎

追啓、御門々々御番所向之儀も 還御後引払之趣、御中間頭・御小人頭江可申達候事

黒鍬之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭
西丸御駕籠之者頭
江

明十一日 右大将様 二丸より 還御之節 右大将様二者御御簾中様 入直ニ 御居附 御簾中様二者御引続西丸御広敷江 帰御被遊候間、為心得申達候事
正月十日 桜井庄兵衛
中川勘三郎
林内蔵頭

御徒目付組頭江

二丸御殿向之儀向後御掃除等別而入念繁々風入いたし候様御小納戸頭取申聞、小普請奉行江相達置候、尤奥向よりも度々見廻り致候旨申聞候、右ニ付御徒目付定日見廻り之節も右之心得ニ而入念候様可被致候

正月

桜井庄兵衛
中川勘三郎

御目付中

石河美濃守

右大将様 二丸江 御逗留中二丸御広敷御長屋御門番人并同七ツ御簾中様

口締戸番共西丸江相勤候様去辰十二月四日申渡置候処、今日

還御相濟候ニ付、前々之通二丸江相勤候様申渡候、此段御支

配向之儀ニ付為御心得申達候、以上

正月十二日

(朱書)
「三百七拾六」

拝領屋敷巢鴨

七軒町

百五拾坪

拝領屋敷根津

元屋敷跡

三拾六坪

右拝領屋敷如元相對替仕度旨願書面江

御書取

覚

此願難相成候事

右越中守殿被仰渡候段甲子次郎殿立合三五郎殿被申渡候

弘化元辰年十二月十四日

御目付衆

諏訪若狭守

拙者支配永田三次郎拝領屋敷根津元屋敷跡、御中間下氏千之助
拝領屋敷巢鴨七軒町与屋敷相對替相願候処、此願難相成旨昨十
四日牧野備前守殿御書取を以被仰渡候間、其段今朝三次郎江申

渡候、此段及御案内候、以上

辰十二月十五日

諏訪若狭守

(朱書)

「三百七拾七」

弘化二巳年二月十一日伊勢守殿御渡御書付

一、来ル廿八日 御本丸江 御移徙可被遊旨被 仰出候

二月十一日

右同断

一、来ル廿八日 御本丸江 御移徙可被遊旨被 仰出候段、今日

不罷出面々江者同席より申通候様可被相達候事

二月

同月 日主膳正殿御渡

来ル廿八日 御本丸江 御移徙、御同日 精姫君様ニも

御本丸大奥江御引移可被遊候、此段為心得向々江可被達候

二月

御中間頭

御小人頭 江

御駕籠之者頭

御移徙之節御道筋、西丸御玄関より同御玄関前御門・同仲仕切
御門・同大手御門・内桜田御門・百人組中御門・御玄関前御門・
御玄関

右之通^二候事

二月

桜井庄兵衛
中川勘三郎

御中間頭^江
御小人頭

御本丸^江 御移徙之節御供御行列、別帳之通伺相済申候、依
之申達候、以上

二月

桜井庄兵衛
中川勘三郎

御中間頭^江
御小人頭

御本丸^江 御移徙之節 御目見并御供開場加番等別紙絵図面之
通相心得、且西丸御玄関前御供建場 御目見之儀是又別紙絵図

面之通^二而、其外之儀者御規式 御成之節之通^二有之候事

二月

桜井庄兵衛
中川勘三郎

右之通御行列帳、御供建・開絵図面とも添、懸り田中甚左衛門よ
り差越

一、天保八酉年四月二日 御移徙之節之例を以、御中間御供組頭^江

御抛鞆持人其外先例之通御断差出可申旨、懸り田中甚左衛門^江

掛合相済組頭彦兵衛^江申談候事

黒鍬之者頭

御掃除之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

御本丸^江 御移徙御当日詰合候 御目見以下之者^江御酒・御肴
被下候事

右之通^二候間人数書取調可被差出候事

二月

桜井庄兵衛
中川勘三郎

伊勢守殿御渡、鉄之丞殿御達

御本丸^江 御移徙之御当日 御本丸方布衣以上以下共於 御

本丸吸物・御酒被下 御目見以下之者^江御酒・御肴被下候間、

其段向々^江可被達候

二月

主膳正殿御渡、鉄之丞殿御達

御機嫌伺并御礼事等 御移徙之御当日より前々之通 御本丸

^江可有出仕候

但使者差出候義も可為同前候

一、献上物前々之通 御本丸^江可差上候

右之通可相触候

二月

御移徙之節御供方之面々、衣服熨斗目半袴着用之事

右之通伺相済申候、依之申達候事

二月

桜井庄兵衛
中川勘三郎

主膳正殿御渡、勘三郎殿御達

御小性組
御書院番
新御番
小十人
御徒

右之分来ル廿六日より西丸当番之内人数引分ケ 御本丸江当番
相替頭々者見廻り候様可被達候

一、同日より老中・若年寄中も見廻り大目付も老人ツ、見廻り候様
二候

一、右之外諸役人者 御移徙当日より 御本丸江当番・詰番等相勤
候様可被達候、尤其以前ニ而も御用有之向者 御本丸江罷越不
苦候

二月

主膳正殿御渡、又市殿御達^(一カ)

二月廿八日

一、御本丸江 御移徙ニ付御供揃四ツ時

一、西丸御玄関より同大手御門内桜田御門通り 御本丸御玄関より
被為入 公方様西丸 出御之節、西丸伺公之面々如例席々

御目見有之候事

帝鑑之間
御譜代衆
同嫡子
諸番頭

諸物頭

布衣以上御役人

同所御縁類
詰衆・御奏者番

之嫡子
菊之間縁類詰

同嫡子
溜之間
溜詰

松平和泉守
同所御床前

松平因幡守
御黒書院御勝手

高家
詰衆

御奏者番
芙蓉之間御役人

此席ニ而
御目見之面々
入候節右之席々ニ

右之面々 御本丸江登城 公方様被為
而 御通掛 御目見有之候事

一、御本丸・西丸共熨斗目半袴着用之事

同廿九日

一、御移徙之為御祝儀 御本丸・西丸江惣出仕、但熨斗目半袴着用
之事

一、惣出仕之面々老中山城守・大和守 御本丸・西丸若年寄中江可被
相廻候

病氣・幼少之面々者月番之老中山城守江使者可被差越候事

一、在国・在邑之面々者老中山城守・大和守江使札可被差越候事
但隠居・部屋住も右ニ准候

右之通可被相触候

主膳正殿御渡、又一殿御達

御移徙当番 御本丸江罷出候面々者於西丸月次御礼相濟候上、

直ニ 御本丸江相廻候様可被達候

二月

伊勢守殿御渡、又一殿御達

御移徙之節御普請掛之面々布衣以上・以下共柳之間溜より柳之

間江掛ケ一同並居 通御かけ 御目見被 仰付候間為心得向々

江可被達候

二月

御中間頭江

来ル廿八日 御本丸江 御移徙之節、御行列相立候御抛鞆御鍵

五十筋之持人御中間手代り并組頭共天保八酉年之通可差出候事

二月

桜井庄兵衛
中川勘三郎

一、明廿二日 御本丸御支配向部屋々々引渡有之候間、請取候様御

徒目付当番所勤番直ニ相立候様勘三郎殿被仰渡候旨、依田源十

郎相達候間中小組頭・御小人目付江も申渡候

一、同日より御目付衆 御本丸御当番相立候ニ付、当番所組頭も泊

番致候趣、右ニ付御供組頭壹人・御小人目付八人・御使之者六

人勤番相立候積、御台所断之儀も来ル廿八日 御移徙迄之間右

御台所断御部屋江差出ス

一、来ル廿六日御当番御目付衆御玄関より御上り之段并都而御締向

制等嚴重ニ心得候様中小組一同江申渡候様小野伝之助相達ス、

右之趣組頭江申渡候

一、御持鍵役部屋之儀御駕籠部屋杯も三人ツ、部屋番出候趣、右ニ

付此方ニ而も三人ツ、差出可申哉、孫兵衛申聞候間其通り心得

候様申渡候

御徒目付組頭江

火之番組頭

御本丸江 御移徙之節 御本丸殿中御夜詰迄熨斗目半袴、西丸

・二丸者御退出後者平服之積

右之通候事

二月

桜井庄兵衛
中川勘三郎

覚

黒鍬之者頭

壹人

御掃除之者頭

壹人

御中間頭

貳人

御小人頭

貳人

御駕籠之者頭

貳人

御中間目付

合人

御小人目付

合人

御中間 四拾五人
百式拾八人
御小人 百六拾五人
御駕籠之者 五拾壹人
黒鋏之者 式百六拾八人
御掃除之者 八拾四人

右者来ル廿八日 御移徙之節御供并出役・勤番・詰番之者人数書
面之通御座候、以上

二月

黒鋏之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

御中間頭江

明後廿八日 御本丸江御移徙ニ付御行列ニ出候御抛鞘五拾筋、
御当朝六時山里御土蔵江罷越請取可申候、且 御移徙相濟御供
之面々開候ハ、御鍵五拾筋蓮池御門御金蔵後御多門江差遣、御
弓鍵奉行江可相渡候、其段御留守居江茂申達置候事

二月廿六日

桜井庄兵衛
中川勘三郎

一、御移徙ニ付御供
一、御抛鞘附

萩原又作
荒井林太夫

御中間頭江御断

覚

御中間

壹人

右者 御本丸御使之者勤番所江日々書面之通相雇申候処、御用
相濟候ニ付御断返申上候、此段御中間頭江被仰渡可被下候、以上

御中間頭
御小人頭
西丸御駕籠之者頭

明廿八日 公方様 御本丸御移徙相濟候上者、西丸大手御門
其外御門々々御番所向心得方・御殿内御番所向并役所々々部
屋々々共都而、前々之通相心得候旨玄蕃頭殿江申上置候、此段申
達候事

二月廿七日

林 内蔵頭

(朱書)
「三百七拾八」

弘化二巳年二月 日当番所組頭横山為次郎を以被遣、答下ケ札い
たし別紙御書付写相添同人江遣

御中間方
御小人方
黒鋏之者
右御譜代之者之内、万石以下陪臣之ものより養子取組候哉之事

御書面養子取組之儀、別紙明和之度石見守殿被成御渡候御書
付之趣を以無続之もの者難成事与心得罷在候

巳二月

黒鋏之者頭
御中間頭
御小人頭

明和六丑年十二月廿七日

石見守殿御渡

他人養子仕候儀、陪臣・浪人之子、御直参ニ親類有之候共、願候
当人之親類ニ而無之候ハ、難成候段、享保十八丑年相達候、右願
候当人之親類与有之候ハ、又従弟迄之事ニ候旨、元文元辰年相
達候、尤又甥も右同様之事ニ候
右之趣向々江寄々可被達候

十二月

(朱書)
「三百七拾九」

弘化二巳年四月 日当番所田臥勝三郎より差越、答下ケ札いたし
例書相添返却

御目付方

御勘定所

公方様御服明ケ紅葉山 御宮江 御参詣被遊候節、其廉ニ而御
中間・御小人・御駕籠之者江清服被下候義有之候哉、左候ハ、右
御書拔被遣候様いたし度此段及御掛合候

巳四月

御書面之趣致承知候、則別紙例書相添及御挨拶候

例書

天明七未年十月 御服明ケ 御装束ニ而紅葉山 御宮江 御

参詣被遊候節、清服被下置候

右之通御座候、以上

巳四月

御中間頭
御小人頭
西丸
御駕籠之者頭

(朱書)
「三百八拾」

弘化二巳年四月十六日 御服明ケ御清御評議濟ニ而左之通四通
ツ、西丸御部屋永務を以差出ス

主膳正殿

玄蕃頭殿

右大将様紅葉山 御宮江 御参詣ニ付

西丸御納戸江御断

覚

月番
小栗又一
水野甲子次郎

一、熨斗目裕

七ツ

御先練御中間

七人

一、綾島裕

七ツ

御中間組頭

七人

右者四月十七日 右大将様紅葉山 御宮江 御参詣之節為着
候間為請取申度奉存候、西丸御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

巳四月

御中間頭
浅井七三郎
荒井林太夫
萩原又作

主膳正殿

〔玄蕃頭殿〕

右大將様紅葉山 御宮江 御参詣ニ付

御細工所江御断

覚

月番

小栗又一
水野甲子次郎

一、茶縮緬袷羽織

但紐共

老

御中間御供組頭

老 人

一、黒加賀絹袷羽織

式拾老

御中間目付

拾六人

御中間押

五人

一、黒絹単羽織

拾六

御中間

拾六人

右者四月十七日

右大將様紅葉山

御宮江

御参詣之節為着

候ニ付書面之通為受取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被

下候、以上

巳四月

御中間頭

前三名

〔朱書〕
「三百八拾老の上」

弘化二巳年四月 日御下ケ答下ケ札いたし返上

御目付衆

御勘定奉行

御代官

勝田次郎手附

御中間持格

杉山八百八

実子

同 八百吉

高拾五俵

老入扶持

右八百八儀病氣ニ付願之通御奉公 御免隠居被 仰付、実子惣

領八百吉江家督被下置父取来御切米御扶持方共被下置候旨、青

山下野守殿被仰渡候間其段申渡候処、先達而及御懸合候通御支

配無役相成候義与者存候得共、御書取ニ無之候間御引渡方如何取

計可然哉、此段及御掛合候

巳四月

書面御中間持格杉山八百八病氣ニ付実子八百吉江家督被下置候処、右八百吉義幼年ニ付御目付支配無役入可相成者ニ者可有之候得共、稔与無役ニ相成候趣被仰渡無之候而者、御中間筋之者ニ而も請取候義者相成兼申候

巳四月

御中間頭

〔朱書〕
〔同下〕

弘化二巳年四月無役世話役より御用所江問合候処、下ケ札之通挨拶有之候旨為心得世話役より差越ス

伯父之続を以相続相願隠居いたし候義可相成候哉、又者大病ニ

付跡目相続ニ無之而者願不相濟候哉、此段御問合申候

巳四月

無役世話役

書面伯父ニ家督相続為致、其身隠居いたし候者願不相濟筋与存候

〔朱書〕
「三百八拾式」

弘化二巳年五月五日老通御当番江御部屋良格を以差出候処、例書問合ニ付類例書相認同人江差出ス

覚

荒井林太夫組御中間

神谷行次郎養祖父

隠居

神谷八十次郎

右八十次郎儀去月廿八日不斗罷出帰宅不仕候ニ付、心当り之所々相尋罷在候内、一昨三日日光道中小金井宿旅籠屋鎌吉方ニ而自害いたし候旨、行次郎より組役之もの江相届候処、小金井宿之儀者 御関所外之儀ニ付、為見知人親類・町人之内兩人罷越、得与見届相違等も無之候ハ、於場所其筋見分受故障於無之者引取罷帰候様可致旨申渡候、依之此段申上候、以上

御中間頭

荒井林太夫

巳五月五日

(朱書)
二三百八十三

弘化二巳年六月 日御用所伊庭保五郎より差越、下ケ札いたし返却

御目付衆

御勘定所

御納戸口番御小人

惣人数六人之内

四人

右天保十一子年御勘定所御修復中見廻り火之元其外共、取締相勤候節御扶持被下候哉致承知度、此段及御問合候

巳六月

本文御納戸口番日々相増相勤候もの老人江老人半扶持之積り、一日米七合五勺ツ、勤日数を以、御修復中御手当扶持被下置候旨、天保十亥年八月八日肥後守殿御書取を以被 仰渡候
右之通御座候、以上

巳六月

御中間頭
御小人頭

(朱書)
二三百八拾四

弘化二巳年六月 日越中守殿御渡、隼之助殿御達五役承付火之番江廻ス

布衣以下之面々屋敷三ヶ所所持之分者老ヶ所、四ヶ所所持之分者式ヶ所差上候様、去々卯年触面之趣も有之候ニ付而者、布衣以下ニ而者屋敷三ヶ所所持いたし候義難成様相成候処、自今者都合ニ寄相对替等相願、屋敷三ヶ所ニ成候而も願可相濟候間、前々之趣ニ可相心得、此段為心得最前相触候向々江寄々可被達置候事

六月

(朱書)
二三百八拾五

弘化二巳年六月 越中守殿御渡御書付五役江者御達不相成候得共、為心得留置

諸向より御入人願差出候節、別段見込之もの之由を以取人之儀申聞候儀有之候得共、番方一ト通之与力・同心等之類ニ者取人之

儀、申聞候儀無用ニ致し候様可為心得候事

(朱書)
「三百八拾六」

書面伺之通被仰渡御納戸御細工所江之御断
可奉差上旨承知仕候

巳十一月廿六日

御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

来月初旬之内 御服明ケ且 御移徙相濟候ニ付、紅葉山 御
宮江御長袴ニ而 御参詣被遊候、尤諸事去ル寅年 御服明 御
参詣之節之通与被 仰出候得共、右者稀成御規式 御成ニ茂御座
候ニ付、御供方御中間・御小人・御駕籠之者清服被下置候様左ニ
奉願候

一、茶縮緬拾羽織

三ツ

御中間御供組頭
老 人

綾縮小袖
但綿代共

三ツ

御小人御使組頭
式 人

麻上下

四具

御小人
御日傘指役
老 人

一、綾縮小袖
但綿代共

四ツ

御草履取役
同 三人

一、黒加賀絹拾羽織

三拾六

御中間目付
御小人目付
御中間押
御小人押
式拾四人
拾式人

一、黒絹単羽織

百拾八

御中間
式拾老人
御小人
九拾七人

(朱書)

一、熨斗目小袖
但綿代共

式拾三

御先練
御中間
同 七人
御小人
拾五人
御小人
拾五人
龜井坊
老 人

一、綾縮小袖
但綿代共

老ツ

同
御参内傘持
老 人

一、素袍・袴・繻子脚半

老具

同
龜井坊
老 人

一、熨斗目小袖
但綿代共

四拾三

御駕籠之者
四拾三人

黒絹単羽織
黒絹小袖
但綿代共
幅広白絹

式拾七
式拾七
式拾七

御駕籠之者
式拾七人

右御駕籠之者着物之儀者 御装束ニ而 御参詣之節者朱書之通、
熨斗目小袖受取申候 御長袴ニ而 御参詣之節者墨書之通、黒絹
単羽織・黒絹小袖・幅広白絹受取申候
右者 御服明ケ紅葉山 御宮江 御参詣并 御移徙濟、初而御同
所江御装束ニ而 御参詣被 仰出候得者、書面之通朱書・墨書之

分共前々御中間・御小人・御駕籠之者江着物清服之廉ニ而被下置候、御旧格を以私共組之者より願出、其時々御内慮相伺御納戸御細工所江之御断書面奉差上、御品之分請取候仕来ニ御座候、然ル処此度者 御長袴ニ而 御参詣与被 仰出候得共、右者全く小給之者共江清服之廉ニ而被下置候訳柄、且是迄 御移徙済初而紅葉山 御宮江 御装束ニ而 御参詣之節々清服被下置、殊文政度若君様御弘メ御祝儀ニ付、御同所江 御長袴ニ而 御参詣并天保度 権現様 御誕生日御支干御相当ニ付、御同所江 御長袴ニ而 御参詣之節々も、御供方御中間・御小人・御駕籠之者江御清之着物被下置候御例等御座候間、来月初旬 御移徙済初而紅葉山 御宮江 御参詣被遊候御儀ニ付、何卒出格之御仁恵を以組之者共江、書面墨書之分清服羽織其外頂戴為仕度、則別紙例書相添此段御内慮奉伺候、以上

(朱書)

「弘化二」巳十一月

例書

- 一、延享二丑年九月廿七日
- 一、宝曆十辰年五月十七日
- 一、天保八酉年六月廿七日

右之通 御移徙後紅葉山 御宮江 御装束ニ而 御参詣之節御供方御中間・御小人・御駕籠之者江御清着物被下置候
 一、文政八酉年三月十七日
 若君様御弘メ御祝儀ニ付紅葉山 御宮江 御長袴ニ而 御参

詣之節御供方御中間・御小人・御駕籠之者江御晴着物被下置候
 一、天保十三寅年十二月廿六日
 権現様 御誕生日御支干 御相当ニ付紅葉山 御宮江 御長袴ニ而 御参詣之節御供方御中間・御小人・御駕籠之者江御晴着物被下置候
 右之通御座候、以上
 巳十一月

主膳正殿

紅葉山 御宮江 御参詣ニ付
 御細工所江御断 御扣
 月番 山口内匠 稻葉清次郎

一、茶縮緬袷羽織 三ッ
 但紐共 御中間御供組頭 老 人
 御小人御使組頭 貳 人

一、黒加賀絹袷羽織 三拾六
 御中間目付 合
 御小人目付 合
 御中間押 貳拾四人
 御小人押 拾貳人

一、黒絹単羽織 百拾八
 御中間 貳拾壹人
 御小人 九拾七人

右者来月初旬 御服明ケ且 御移徙相済候ニ付、紅葉山 御

宮江 御参詣之節御供之者江為着候二付、書面之通為請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

巳十一月

御中間頭

浅井七三郎

荒井林太夫

萩原又作

御小人頭

柳田勝太郎

榎原栄五郎

志賀長十郎

主膳正殿

紅葉山 御宮江 御参詣二付

御納戸江御断 御扣

月番

山口内匠

稻葉清次郎

覚

御中間御供組頭

式人

御小人御使組頭

式人

一、綾縞小袖 三ツ

但老ツニ付綿代金老両式朱宛之積

一、麻上下 四具

綾縞小袖 四ツ

但老ツニ付綿代金老両式朱宛之積

御日傘指役

式人

同

御草履取役

三人

右者来月初旬 御服明ケ且 御移徙相濟候二付、紅葉山 御

宮江御参詣之節為着候二付、書面之通為請取申度奉存候、御納戸

江御断被仰渡可被下候、以上

巳十一月

御中間頭

浅井七三郎

(朱書)
「三百八拾七」

弘化二巳年十二月十三日御当番江老通品書相添且西丸御供御目付衆江御扣老通差出ス

紛失御届

覚

萩原又作組

御中間

伊藤次太夫

右之者去ル九日小松川筋江 御成ニ付西丸御注進御用相勤

還御迄、両国米沢町三丁目家主徳兵衛店松蔵方江同役一同休息

所申付罷在候処、朝四時頃俄ニ疝積ニ而差込強脇差取り間内江差

置、暫取臥罷在便所江可相越与存候処右脇差相見不申候二付、休

息所之内相尋同役共并松蔵をも相尋候得共心当之儀無之旨申聞、

別紙之通紛失仕候間同役相頼脇差者宅より取寄御供相勤申候、

尤町触之儀者相願不申旨治太夫相届申候、依之申上候、以上

巳十二月十三日

御中間頭

萩原又作

覚

萩原又作組

御中間

伊藤治太夫

御小人頭

柳田勝太郎

榎原栄五郎

志賀長十郎

萩原又作

荒井林太夫

紛失之品

一、脇差 身長サ 壹尺貳三寸程 壹腰

一、縁 身 無銘 岩石金焼附

一、頭 塗角

一、鮫 白

一、目貫 銅 梅ニ鶯之彫

一、柄糸 御納戸

一、切羽・鍬 金焼附

一、鐔 赤銅丸

一、鷓目 赤銅

一、小柄 真鍮 小刀無銘

一、鞆 朱うるみ虫喰塗

一、鑑 四分一

一、下ケ緒 御納戸縁茶

十二月

(朱書)
「三百八十八」

弘化二巳年十二月五日御当番江老通御部屋長養を以出ス

覚

萩原又作組御中間

小普請方御門番人出役

池谷金次郎

右金次郎儀御用相濟候ニ付出役 御免元組江帰番被 仰付候間、

小普請方手代組頭勤方吉沢定右衛門より組役之者請取候旨相届

申候、依之申上候、以上

十二月五日

御中間頭

萩原又作

(朱書)
「三百八十九」

右大將様遠 御成之節御場濟御注進状 御膳所より西丸江計是

迄差出、西丸・御本丸江申達候処左候而者遅刻ニも相成候間、以

来者同時ニ両丸江差出候間、其心得ニ而野方御使之者差出候様可

致候、右者 御本丸御小納戸頭取深津近江守申聞候間半左衛門

殿より懸合有之候間、前条之通以来取極置度依之申達候、以上

(朱書)
「弘化三年」二月十日 松本十郎兵衛

右者以来兩人ツ、相増候間其段御供組頭江申談置候事

(朱書)
「三百九拾 五百八十六番組合」

今度本郷丸山辺より之出火風烈大火ニ而焼失之儀軽キ者共可為

難儀候、御奉公相勤候者御足高・持高共百俵より以下之もの共

江為御救左之通御金被下候、受取方等之儀御勘定奉行可被談候

一、百俵より 金七兩

八拾俵迄

一、七拾俵より 金五兩

五拾俵迄

一、四拾俵より 金三兩

三拾俵迄

一、式拾俵より
拾五俵迄

金貳両

一、拾四俵以下

金壹両

右之通向々江可被相触候

(朱書)

「弘化三年」正月

主膳正殿御渡、式部少輔殿御達

類焼之面々御切米御扶持方取越被下候儀、此度者不勤之者共も

取越米被下候間、勤仕之者共同様御勘定奉行申談候様可被致候

右之通可被相達候

正月

(朱書)
「三百九拾壹」

弘化二巳年十二月差出候処、同三午年正月廿二日伺書・由緒共御

下ケ御附札之通可相心得旨織部殿被申渡

覚

御目付支配無役

中井栄治

右栄治儀先祖御中間江被 召抱、其後御掃除之者相成他場所相

勤、此度無役ニ相成候ニ付御中間方無役与相心得可申哉伺

巳十二月

御掃除之者頭

御中間頭

無役世話役

書面栄治儀曾祖父平七安永七戌年七月御目付支配無役被

仰付、同八亥年願之通隠居被 仰付候節、御掃除頭柳田直
次郎申渡候旨譜中ニ相見候上者、御掃除無役江入候者与相聞
候間、此度伺之趣も御掃除無役ニ相心得可申事

(朱書)
「三百九拾貳」

弘化三午年七月廿四日御用所御使鈴木金助持参、下ケ札いたし翌

廿五日同所江返却

御目付衆御支配五役与相唱候向何之御役ニ御座候哉、雛形出候者

御中間・御小人・御駕籠・黒鍬与四役出申候、今一役者御掃除方

ニも御座候哉、是者指物類毎々出不申候哉、無急度御問合申候事

七月

福島五左衛門

書面五役与相唱候者御中間・御小人・御駕籠・黒鍬・御掃除
ニ而候、雛形之儀御掃除方ニ而者差出不申候

午七月

黒鍬之者頭

御掃除之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

御中間方・御小人方とも西丸分出不申候、此儀も無急度御問合申
候事

午七月

福島五左衛門

書面御中間方・御小人方とも前々より西丸分差出不申候
午七月廿五日

御中間頭
御小人頭

(朱書)
「三百九拾三」

遠山半左衛門殿

蜷川能登守

田竊君殿御乳持

荒井林太夫組

御中間

鈴木兵次郎妻

同人娘

午式歳

右妻御乳御用立不申候、御暇被下子江為養育来ル申年十二月迄御
扶持三人扶持被下候、依之御達申候

但御証文願并請取方等之儀、且年限相濟候節も其頭支配より申

上候積、兼而伺濟ニ候事

午八月

(朱書)
「三百九拾四」

一、去午九月十一日浜御庭江 御成之節強雨ニ付別段御手当割合
之儀鉄之丞殿江相伺候処、四役打込無甲乙惣割ニ致候様被申渡
候ニ付、左之通割合夫々江相渡ス

金四拾兩 四役惣人数式百六人割
老入ニ付拾老刃六分五厘宛

一、金九兩式分式朱卜

五百四拾文

御中間方

五拾人

但御供組頭式人、中小目付拾七人、中小押式人、平役式拾

九人

一、金拾兩式分式朱卜 御小人方 五拾五人
三百五拾文

一、金三兩老分式朱卜 御駕籠方 拾八人
七百七拾六文

一、金拾六兩卜 黒鍬之者 八拾三人
七百四拾八文

右之通り

(朱書)

「弘化四」未三月十一日

(朱書)
「三百九拾五」

弘化四未年四月七日安芸守殿被仰渡候段内匠殿立合、中務少輔殿
被申渡承付返上

御目付江

御中間

小宮山十郎左衛門

金三兩

右数年無懈怠相勤候ニ付為御褒美書面之通被下候間、其段可被申
渡候、被下金者御納戸頭江相談可被請取候

(朱書)
「三百九拾六」

覚

濡御手当願之儀紅葉山 御宮江 御装束ニ而被為 成候節、御轅

御玄関江相廻候御駕籠之者十二人、都而遠 御成之節御玄関 通
御之節平伏罷出候御玄関番三人、遠 御成之節前日野田御駕籠御
玄関江相廻候御駕籠之者拾式人、二丸・三丸其外御風呂屋口より
御成 還御之節御同所御先番罷出候御駕籠之者八人、山王祭礼
ニ付吹上 上覧所江被為 成候節、喰事代り御挑灯御用御玄関
御先番兼御駕籠之者八人之儀者難被及御沙汰候、其余之廉々
者以来濡御手当可被下候趣、御駕籠之者大成殿 御参詣之節者四
拾人分、御三家方屋敷御住居向 御通拔之節者三拾式人分被下、
品川筋・志村筋・真間筋・牌文谷筋(牌九)・西新井中野筋 御成之節
者 御膳所、堀之内村妙法寺之節者三拾式人之外増人拾人分被下
候、且又辰年以来 御成之時宜ニ而臨時出役之趣を以断書差出候
も有之、御駕籠之者・黒鍬之者等之内ニ者臨時出役之趣も無之、
人数増ニ断書差出候も有之、向後右様之廉者臨時之詛委細取調
精々人数吟味詰、伺之通断書差出候様取計、其余者改正ニ調ニ不
洩様取調、人数精々省略いたし、別段可被相伺候事

(朱書)
「弘化四末」七月

松平式部少輔
遠山半左衛門

(朱書)
「二百九拾七」

弘化四未年八月 日西丸御使之者持参承附相返ス

覚

支配向濡御手当之儀、前々之引付ニ而人数 御本丸より増候茂相
見候ニ付、御目付打合廉々人数等 御本丸ニ准シ、委細取調可被
相伺候事

同月 日廻状之内

一、内蔵頭殿御用ニ付中小頭之内老人相廻候様申来候ニ付、榊原氏相
廻候処、内蔵頭殿被成御逢濡御手当減方被仰渡候ニ付 御本丸
ニ見合取調早々差出候様被申渡候ニ付奉承知候旨申上、尤 御
成御場所且模様ニ寄 御本丸より者人数相増候廉も有之、其
上西丸勤之儀者外收納等も無之候ニ付、宜御含被下候様申上置、
且御用所原田与三郎取扱候ニ付引合候処、西丸 御成人数高
取調 御本丸減帳写相添差出候様申聞候、其段組頭角部屋世話
役江申渡候

(朱書)
「二百九拾八 四百老与組合」

嘉永元申年三月十四日隼之助殿・市右衛門殿御両人御列席ニ而御
渡承付返上

御中間頭
御小人頭 江

御中間目付・御小人目付跡役之儀、是迄両度共月番同役ニ而吟味
いたし、一度者頭々之取調ニ而名面書出候儀仕来与者乍申不相当
之儀ニ付、右者此度評議之上以来者月番同役計ニ而吟味いたし候
間、此段兼而申渡置候、以上

申三月十四日

本多隼之助
三宅市右衛門

但去ル七日隼之助殿江差出候御内慮伺并寛政度向後御中間目
付・御小人目付跡役之儀、三度之上老度者頭吟味之上古格之
通書出可申旨、神保四郎左衛門殿・森川主膳殿御渡御書取
写御小人方組頭差出候書面共三通御戻被成候上、前書御達
書被成御渡月番同役吟味之節、触番其外内役之者茂罷出
候儀ニ付、頭役之儀ニも有之候間、当人精勤等之見込之趣申
立候様可致旨、厚被申渡候事

申三月十四日

(朱書)
「三百九十九」

嘉永元申年四月五日甚兵衛殿御書取、依田源十郎を以御下ケ、ヒ
レ付返上

覚

御中間頭

浅井七三郎組

久保田小八郎養母

しつ

右本多越中守殿江駕籠訴いたし候ニ付請取人之事

覚

浅井七三郎組

御中間

久保田小八郎養母

しつ

右之者昨五日本多越中守殿江駕籠訴いたし候ニ付、請取人差出

可申旨被仰渡候間、組役之者并親類・組合之者差出候処、御同人
御家来江川惣右衛門・元板助八より、当人并訴状共受取召連罷帰
候旨相届申候間、親類并小八郎組合之者江も心得之儀申渡置候、
依之此段御届申上候、以上

四月六日

御中間頭
浅井七三郎

一、拙者組久保田小八郎養母儀、当月五日本多越中守殿江駕籠訴致候
ニ付、受取人差出其段翌日御届致置候処、右者全取昇諸方も無之
儀申立恐入候段、養母・小八郎并親類・組合之者より書面差出候
ニ付、小八郎儀手限ニ而慎申渡、親類・組合江者猶心得之儀申渡、
右一件落着仕候段、御筆頭式部少輔殿当月五日之御当番甚兵衛
殿江右之趣口上ニ而申上候処、御聞置被成候旨被仰聞候、尤御部
屋幸益江引合之上、右之通取扱候事

四月十六日

(朱書)
「四百」

嘉永元申年七月十七日老通例書添御当番江差出候処、願之通可申
渡旨鉄之丞殿御部屋良務を以御下ケニ付承付返上

杉野甚平組

御中間組頭

笹川文左衛門

右者病氣ニ付撰州有馬江湯治仕度旨相願申候、依之申上候、以
上

申七月十七日

御中間頭
杉野甚平

例書

鈴木宇右衛門組

西丸御中間目付

三浦七藏

右七藏儀文政九戌年四月十五日但州木之崎江湯治仕、同年七月五日帰府仕候

申七月十七日

御中間頭

杉野甚平

右出立帰着御届者留略候事

(朱書)

〔四百壹 三百九十八と組合〕

嘉永元申年九月

一、御中間目付・御小人目付跡役之儀、寛政度以来兩度御目付衆御撰老度者頭手調与申順之处、向後者御撰計之積先達而御達有之此節明キも有之、心願之者多く人数・名前差出候处、此後者頭方ニ而一ト通吟味いたし候上、老入明キ候ハ、両三人も見込之者別紙ニいたし差出候様可致、左様無之候而者頭之詮も無之候間、此度右之通御評議相濟候旨、市右衛門殿被申渡候

(朱書)

〔四百貳〕

御問合

表御右筆所

元御中間

高橋喜兵衛妻

娘 式人

右扶助米請取方誰表判誰裏判ニ候哉、御問合之事

(朱書)

〔嘉永元申〕四月十四日

吉田源次郎

御書面之趣者御中間頭之内老入表判、月番之御目付老入

裏判ニ而候

御中間頭

杉野甚平

(朱書)

〔四百三〕

一、忌十日

九月廿九日より

御中間頭

杉野甚平

一、服三十日

九月廿九日より
十月廿八日迄

右甚平末女儀病氣之处養生不相叶昨廿九日戌刻病死仕候間、定式之忌服請申候旨申越候、依之此段御届申上候、以上

(朱書)

〔嘉永元申〕九月晦日

御中間頭

浅井七三郎

荒井林太夫

(朱書)
〔四百四〕

嘉永二酉年二月十九日

荒井林太夫組御中間磯部孫八郎元無役之節、同人倅武兵衛儀身持不宜候ニ付、久離之儀弘化三年四月御用番市右衛門殿江申上置、町奉行所江差出、久離御帳付仕候处、武兵衛儀此節身持宜相成候ニ付、御帳消相願候ニ付、其段御月番江申上置之書面能登守殿江差出、後刻御月番御一覽之上御下被成候事

〔四百五〕

御目付方

御勘定所

駒場野其外遠 御成并 還御夜ニ入候節、野方御使注進御用并
御馬牽差引等之御用ニ而 御紋附御挑灯・蠟燭被受取候先格有
之候哉承知致度、早々御取調否御申聞有之候様存候、依之此段
及御掛合候

〔朱書〕

「嘉永二酉」二月十五日

○ 御挑灯老張ニ付蠟燭者一夜何挺
ツ、御受取ニ相成候哉

御書面并御下ケ札之趣致承知候、駒場野并遠 御成之節、野方
御使之者御注進御用之方江都度々々御挑灯奉行より 御紋附
御挑灯・蠟燭とも受取申候、蠟燭之儀者御挑灯老張ニ付下拾匁
掛式挺之積、右者一時余之見積りニ御座候、且御馬牽人差引之
方ニ而是迄御挑灯・蠟燭共請取候義無之候、勿論是迄夜ニ入候
迄御馬牽人遠路ニ而差引等致候義者無之候、此段及御挨拶候
酉二月 御中間頭

〔四百六〕

御中間頭

浅井七三郎 荒井林太夫
右七三郎当三月十六日御徒目付被 仰付候ニ付、林太夫・私兩人

ニ而明キ組之者支配仕候旨申上置候処、今六日林太夫儀西丸御
裏門番与力被 仰付候ニ付、両明組共私支配仕候、依之申上置
候、以上

〔朱書〕

「嘉永二酉」閏四月六日

御中間頭

杉野甚平

〔四百七〕

嘉永二酉年八月 日御用所由緒懸り御使を以被遣下ケ札いたし返上

御中間頭江

宝永之頃畔柳助九郎与申御中間頭有之候哉、且右支配ニ而五之丸
御門番与申御役名有之哉否相糺可申聞事

酉八月

遠山半左衛門

御書面畔柳助九郎与申者、四代御中間頭相勤申候、宝永之頃
相勤候者三代目助九郎ニ而御座候
右支配ニ而五之丸御門番与申御役名有之哉之段、旧記書物等
無御座候而相分り兼申候
九月 御中間頭

〔四百八〕

嘉永二酉年十二月八日

御中間筋無役岩堀政吉父隠居孫次郎事岩堀喜三郎儀、身持不宜
候ニ付、右喜三郎母并親類共より追出久離御帳附致度、願書堅物
壹通無役世話役小林久次郎同席ニ而中務少輔殿江差出候処、後刻

例之通取計候様御同人被申渡、書面御下ケ被成候旨久次郎申聞候事

(朱書)
「四百九」

嘉永三戌年三月六日

一、喜多野省吾組御中間御作事方定普請同心出役過人土戸永四郎、浦賀奉行組同心増人被 仰付候由ニ候得共、何方よりも沙汰無之ニ付、御目付衆より御達有之候様致度旨、御大工頭松田弥太郎より懸合越候ニ付、其段御部屋祐守を以申上、左之御達書認メ差上ル

喜多野省吾組

御中間

御作事方定普請同心出役過人

土戸永四郎

右永四郎儀浦賀奉行組同心増人被 仰付候旨、一昨五日主膳正

殿被仰渡候、依之申達候、以上

三月七日

三宅市右衛門
鵜殿甚左衛門

(朱書)
「四百拾」

覚

元御中間

岡田次郎兵衛養父隠居

岡田四郎作

同人妻 かね

同人娘 老人

右次郎兵衛儀文化七午年十二月不届之儀有之追放被 仰付、御

切米御扶持方上り家断絶仕候ニ付、書面之者共親類共江引渡置、

翌未年九月御扶助米之義奉願候処、同月願之通養父・妻・娘江為

取統一生之内三人扶持被下置候旨被仰渡候処、次郎兵衛儀天保

十二丑年六月追放 御免被 仰付候得共行衛相知不申、且四郎

作儀同月病死仕候ニ付其段申上御扶助米高之儀奉伺候処、是迄

之通三人扶持被下置候旨被仰渡候、然ル処尚又次郎兵衛妻儀当

月二日病死仕候旨相届申候、依之娘江被下置候御扶助米高如何

相心得可申哉奉伺候、以上

(朱書)

「嘉永三」戊八月廿六日

御中間頭

杉野甚平

御書取

覚

只今迄之通三人扶持被下候間其段可被申渡候、尤御勘定奉行江可被談候事

右但馬守殿被仰渡候段十郎兵衛殿立合市右衛門殿被申渡候御書取

繕付返上

(朱書)
「四百拾壹」

嘉永四亥年三月五日十郎兵衛殿被仰渡候旨当番所吉川一兵衛より相達ス

御中間頭

杉野甚平組

奥表仕切土戸番

清水市三郎

右唯今松本十郎兵衛宅江可被差出候、病氣候ハ、名代可差出候

同断

同断

小宮山太郎右衛門

同断
外山和太夫組

同断

望月孝太郎

御中間
(頭脱力)

杉野甚平組

奥表仕切土戸番

清水市三郎

名代

触番之者

桜井甚五右衛門

同断

同断

小宮山太郎右衛門

名代

猪飼清三郎

同断

外山和太夫組

同断

望月孝太郎

名代

御扶持方賄役助
田口次郎兵衛

差添之者

杉野甚平組御中間

触番之者

伊藤次大夫

外山和太夫組御中間
御扶持方賄役

杉山祐左衛門

差引之者

杉野甚平組

御中間組頭

笹川文左衛門

右主膳正殿被仰渡候段、御目付大久保彦左衛門殿立合松本十郎

兵衛殿被申渡候

亥三月五日

覚

杉野甚平組

御中間

清水市三郎

小宮山太郎右衛門

外山和太夫組

同断

望月孝太郎

右之者共昨五日松本十郎兵衛殿於御宅如何之趣も相聞候ニ付御

暇可申付旨、主膳正殿被仰渡候段大久保彦左衛門殿立合十郎兵

衛殿被申渡候、依之申上候、以上

三月六日

御中間頭

杉野甚平

外山和太夫

覚

御中間

清水市三郎兄

同断

同人甥

同断

小宮山太郎右衛門父

杉野甚平組

御中間

清水清兵衛

同人組

同断

清水金平

同人組

同断

小宮山十郎左衛門

同断
同人次男

同人組

同断
小宮山松三郎

外山和太夫組

同断

望月孝太郎次男

望月作之助

喜多野省吾組

同断

同人甥

佐野銀三郎

右者昨五日松本十郎兵衛於宅御中間清水市三郎・小宮山太郎右衛門・望月孝太郎儀如何之趣も相聞候ニ付、御暇可申付旨主膳正殿被仰渡候段、大久保彦左衛門立合十郎兵衛申渡候、依之書面続合之者共押込置可申哉奉伺候、以上

三月六日

御中間頭

杉野甚平

外山和太夫

喜多野省吾

右書面差出候処不及差出旨ニ而御下ケ相成、向後共右様御答請候節者不及伺候段、御当番大久保市郎兵衛殿御部屋久悦を以被申渡候事

(朱書)
「四百拾貳」

杉野甚平組

和田金蔵

稲田七郎左衛門

小沢勢十郎

山崎政八郎

外山和太夫組

東浦鏡次郎

佐藤直次郎

(崎)
加瀬騎十郎組

細野八兵衛

伊藤斧太郎

安原益次郎

藤村権左衛門組

津田一三郎

堀江六五郎

伊内権三郎

右名面之もの御中間目付・御小人目付見習可申渡旨市右衛門殿被仰渡候

但甚平組者大組ニ付五人、其外者一組三人ツ、之旨御口上ニ而被仰渡候、且明組者頭被 仰付候迄評議之旨被仰聞候

(朱書)

「嘉永四亥」三月廿三日